

(2) <sup>とめ</sup>留 <sup>ぬま</sup>沼 遺 跡

# 目 次

I	遺跡の位置と周辺の遺跡	544
II	調査の方法と経過	544
III	調査の成果	547
	遺跡の層位	547
	発見された遺構と遺物	549
	溝	549
	遺構以外からの出土遺物	549
IV	考察	551
V	まとめ	552

## 調査要項

遺 跡 名：留沼遺跡

遺 跡 記 号：B Z（宮城県遺跡地名表登載番号：27019）

遺跡所在地：宮城県古川市大柿字留沼 46

調 査 面 積：約 380 m<sup>2</sup>（発掘面積約 200 m<sup>2</sup>）

調 査 期 間：昭和 55 年 10 月 6 日～10 月 23 日

調 査 員：宮城県教育庁文化財保護課

新庄屋元晴、土岐山武

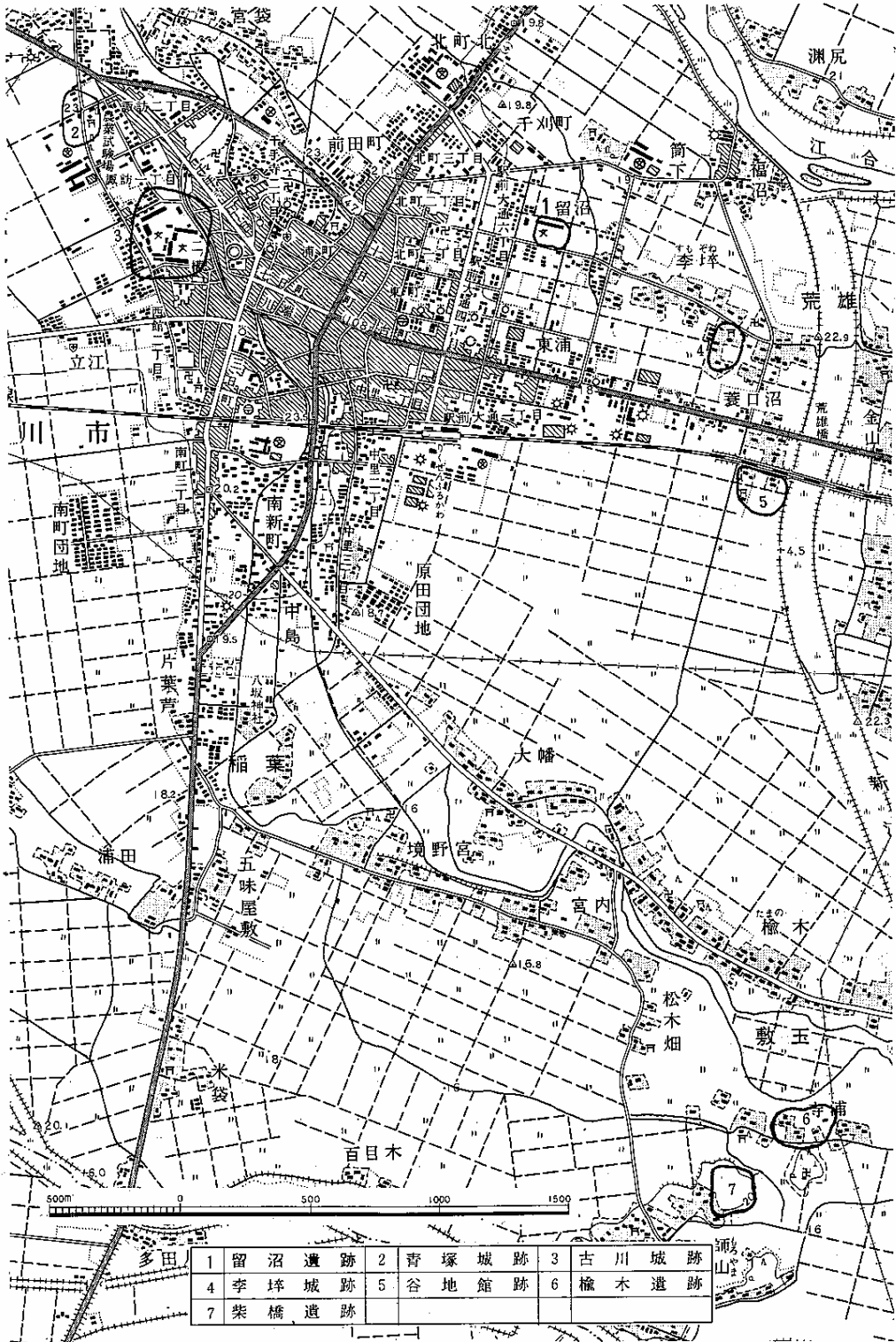
調査協力者：佐藤信夫、小松平治、石崎三郎、門間弘、高橋正三、佐々木一郎

岡村政義、本田喜一、福地みち子、山崎征子、喜藤興一、青沼啓一

石ヶ森信夫、佐々木幸利、加藤次男、関孝浩、青沼洋一、佐々木秀征

調査協力機関：古川市教育委員会

日本国有鉄道東北地方自動車部



第1図 周辺の遺跡

## I. 遺跡の位置と周辺の遺跡

留沼遺跡は、国鉄陸羽東線陸前古川駅の北約1km、古川市大柿字留沼46、古川市立第二小学校跡地一帯に所在する。古川市は県の北部に位置しており、北は栗原郡、東は遠田郡、南は志田郡、西は玉造郡および加美郡と境を接している。古川市を含めた県北部の地形を概観すると北部一帯は奥羽山脈から派生する標高50m前後の築館丘陵が樹枝状に東に延びており、丘陵の南には江合川、鳴瀬川両河川によって形成された大崎平野が広がっている。古川市はその中心にあたり、留沼遺跡は江合川の南側、同河川によって形成された氾濫原および自然堤防上に立地している。標高約19m、周辺の水田面との比高は約1～2mである。

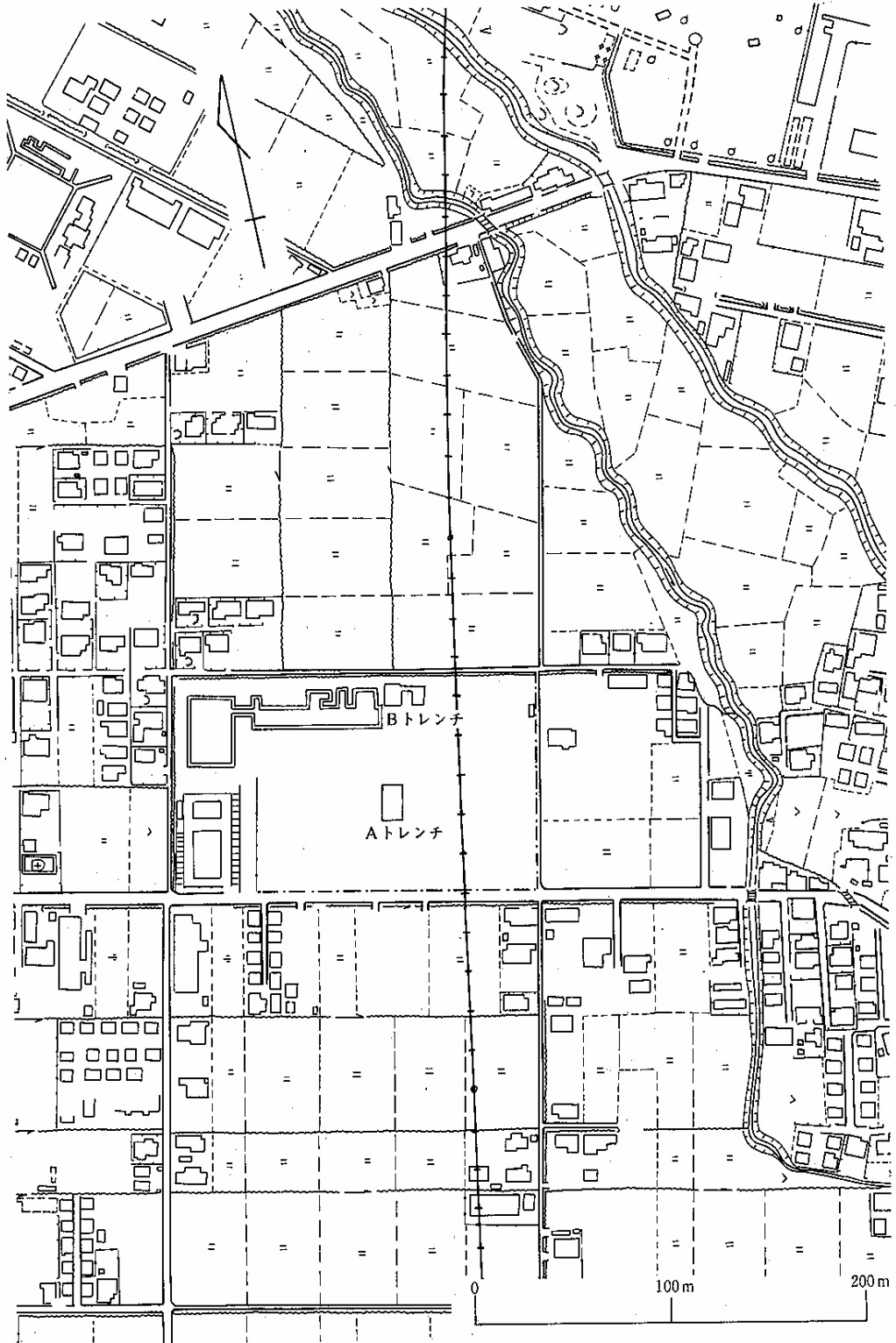
付近には旧石器時代から中・近世までの各時期にわたって多くの遺跡が存在する。本遺跡は古墳時代の遺跡として知られているが、同時代の集落跡としては塚ノ目遺跡・竹ノ内遺跡・新田町遺跡・高幌遺跡などがあり、塚ノ目遺跡や竹ノ内遺跡からは塩釜式期の住居跡が検出されている。また、同時代の古墳としては青塚古墳・塚原古墳群・日光山古墳群・朽木橋横穴古墳群などがある。

## II. 調査の方法と経過

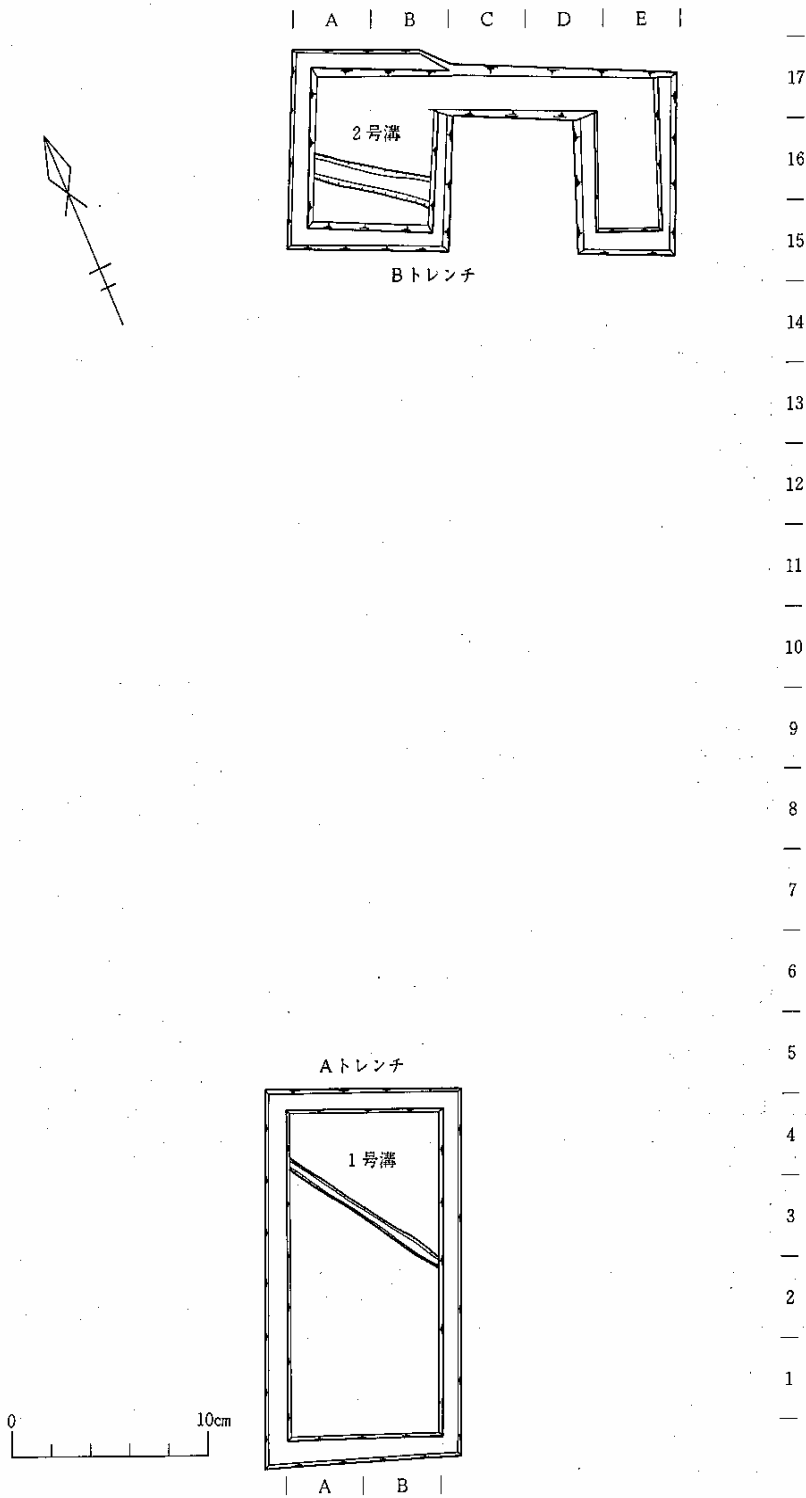
留沼遺跡は昭和36年に古川第二小学校建設の際、南小泉式土器と石製模造品が出土したことから知られるようになり、昭和49・50年には東北新幹線工事に伴い発掘調査が実施され、塩釜式期の竪穴住居跡の検出、および同時期の遺物が出土した遺跡である。今回の調査は日本国有鉄道東北地方自動車部によるバスターミナル建設に伴うもので、同遺跡における三回目の発掘調査である。以下、方法と経過について記述する。

### 調査の方法

地区設定にあたっては校舎東端の南北延長線（N-23°-E）を基準線として、対象地区全体に4m単位を1とするグリッドを設定し、それをいくつか合わせてトレンチとした。トレンチ名は南側をA、北側をBトレンチとした。なお、グリッド名は東西方向をアルファベット、南北方向をアラビア数字で示した。実測図作製にあたっては発見された遺構については20分の1の平面図を平板によって作製した。



第2図 遺跡の位置と周辺の地形



第3図 遺構、グリッド配置図

## 調査の経過

調査はA地区約180 m<sup>2</sup>、B地区約200 m<sup>2</sup>を対象として昭和55年10月6日から開始された。発掘調査は両トレンチ並行して行なわれた。Aトレンチでは重機で校庭にした際の整地層を取り除き、旧表土以下は手掘りで行なった。その結果、遺構としては溝が、II層上面で1本確認され、遺物としては土師器が第V層からわずかに出土したが、VI層以下は無遺物であることが確認されたため、東壁・南壁の断面図を作製しAトレンチの調査を終了した。

Bトレンチは校舎建設の際の破壊をまぬがれた部分のみ調査を行なった。調査方法はAトレンチと同じである。その結果、遺構としては溝がII層上面で1本確認され、遺物としては土師器がIII、IV、V、VI、VII層から出土した。特にVI、VII層からは比較的多く出土したが、VIII層以下は無遺物層であることが確認されたため、東壁、北壁の断面図を作製し、10月23日すべての調査を終了した。

## III. 調査の成果

### 遺跡の層位

AトレンチとBトレンチでは層位に若干の相違が認められた。以下、各層の状況についてトレンチごとに記述する。

#### Aトレンチ

0層：中礫と粗砂とからなる層である。校庭の整地層の厚さは65～85cmである。

I層：細砂、砂質シルトとからなる層である。旧表土（水田耕作土）で、層の厚さは16～20cmである。調査区全域に認められた。なお、1-B区南壁断面においてこの層上面からの落ちこみが観察されるが、これは水田耕作時のあぜの跡と思われる。

II層：細砂からなる層で、わずかに粘性をおびている。層の厚さは10～16cmである。1号溝はこの層の上面で確認されている。

III層：細砂からなる層である。層の厚さは2～6cmと非常に薄く、しかも部分的に観察されるだけである。

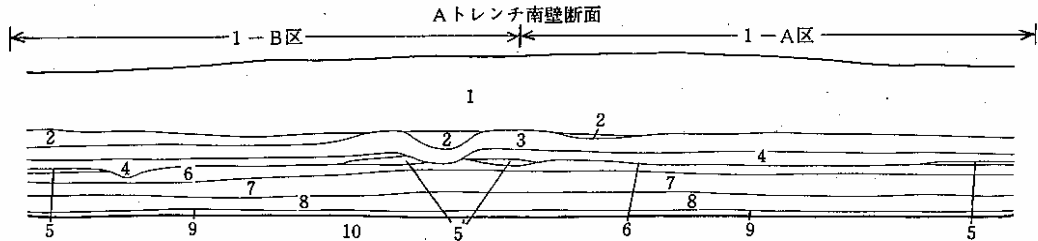
IV層：細砂からなる層で、わずかに粘性をおびている。層の厚さは4～14cmである。

V層：中砂からなる層である。層の厚さは10～16cmである。層中からわずかではあるが遺物が出土している。

VI層：細砂からなる層である。層の厚さは10～16cmである。

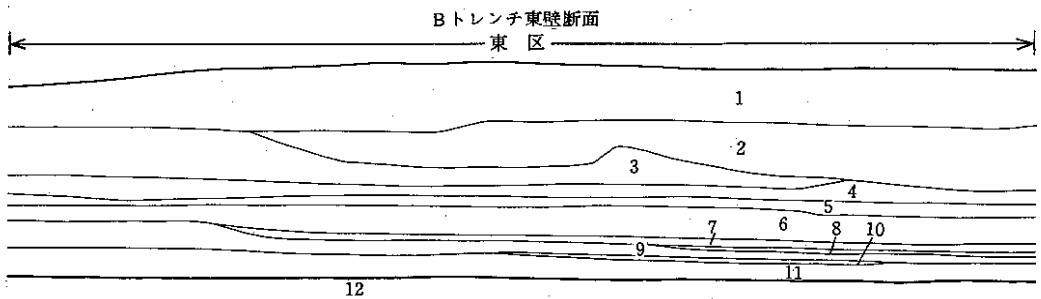
VII層：細砂からなる層で粘性が強い。層の厚さは10～18cmである。腐植物を含んでいる。

VIII層：中砂からなる層である。腐植物をわずかに含んでいる。



層位	層No.	土色	備考
0層	1	暗灰黄(2.5Y 5)	整地層である。
	2	灰オリーブ(5Y 5)	
I層	3	灰 (10Y 5)	旧表土(水田耕作土)である。
II層	4	オリーブ黒(10Y 3)	にぶい黄褐色が混在している。
III層	5	緑 灰(10GY 3)	黒褐色土が混在している。
IV層	6	灰 (10Y 5)	にぶい黄褐色と黒褐色土が混在している。
V層	7	灰 (10Y 5)	にぶい黄褐色が多量にまじっている。
VI層	8	にぶい黄褐色(10Y R 5)	
VII層	9	灰 (10Y 5)	腐植物を含む。
VIII層	10	緑 灰(10GY 3)	腐植物をわずかに含んでいる。

層位	層No.	土色	備考
0層	1	暗灰黄(2.5Y 5)	整地層である
	2	灰 黄(2.5Y 5)	明黄褐色土を混入する
	3	灰オリーブ(5Y 5)	小石を含む
I層	4	灰 (10Y 5)	旧表土(水田耕作土)である
	5	灰 (10Y 5)	黄褐色土を多量に含む
II層	6	にぶい黄褐色(10Y R 5)	灰色土をわずかに含む 遺物をわずかに含む
III層	7	黒 (5Y 3)	腐植物を多量に含む
IV層	8	暗灰黄(2.5Y 5)	粘性をおびている
V層	9	灰オリーブ(5Y 5)	遺物を含んでいる
VI層	10	黒 (2.5Y 3)	腐植物を多く含んでいる 遺物を含んでいる
VII層	11	灰 (10Y 5)	腐植物をわずかに含んでいる 遺物を含んでいる
VIII層	12	緑 灰(10GY 3)	腐植物をわずかに含んでいる 遺物を含まない



第4図 遺跡の層位

## Bトレンチ

0層：中礫と粗砂とからなる層である。校庭の整地層で、層の厚さは0.7～1mである。

I層：細砂、砂質シルトとからなる層である。旧表土(水田耕作土)で層の厚さは約20cmである。

II層：細砂とからなる層である。層の厚さは10～20cmである。一層中からわずかだが遺物が出土している。2号溝はこの層上面で確認されている。

III層：腐植物とからなる層である。層の厚さは0～10cmで、北側から南側にかけて傾斜している。

IV層：細砂とからなる層で粘性をおびている。層の厚さは6～20cmである。層中から遺物が出土している。

V層：中砂とからなる層である。層の厚さは約5cmである。層中から遺物が出土している。



Ⅵ層：細砂からなる層で粘性をおびている。層の厚さは0～5cmである。腐植物を多く含んでいる。層中から遺物がまとまって出土している。

Ⅶ層：中砂からなる層である。層の厚さは12～24cmである。腐植物をわずかに含んでいる。層中から遺物が出土している。

Ⅷ層：中砂からなる層である。腐植物をわずかに含んでいる。遺物は含まれていない。

## 発見された遺構と遺物

### 溝

A、Bトレンチからそれぞれ1本ずつ溝が検出されている。

#### 1号溝

AトレンチA・B-3・4区Ⅱ層上面で確認された。北西-南東方向に延びており、確認長約9.5m、幅40～60cm、深さ10～30cmである。底面は比較的平坦である。堆積土は5層認められる。レンズ状に堆積しており、自然堆積状態を示している。なお、堆積土中から遺物は出土していない。時期については不明である。

#### 2号溝

Bトレンチ東区Ⅱ層上面で確認された。北西-南東方向に延びており確認長約6cm、幅1～1.5m、深さ約15cmである。底面は平坦である。堆積土は1層しか認められず、遺物の出土もなかった。時期については不明である。

## 遺構以外からの出土遺物

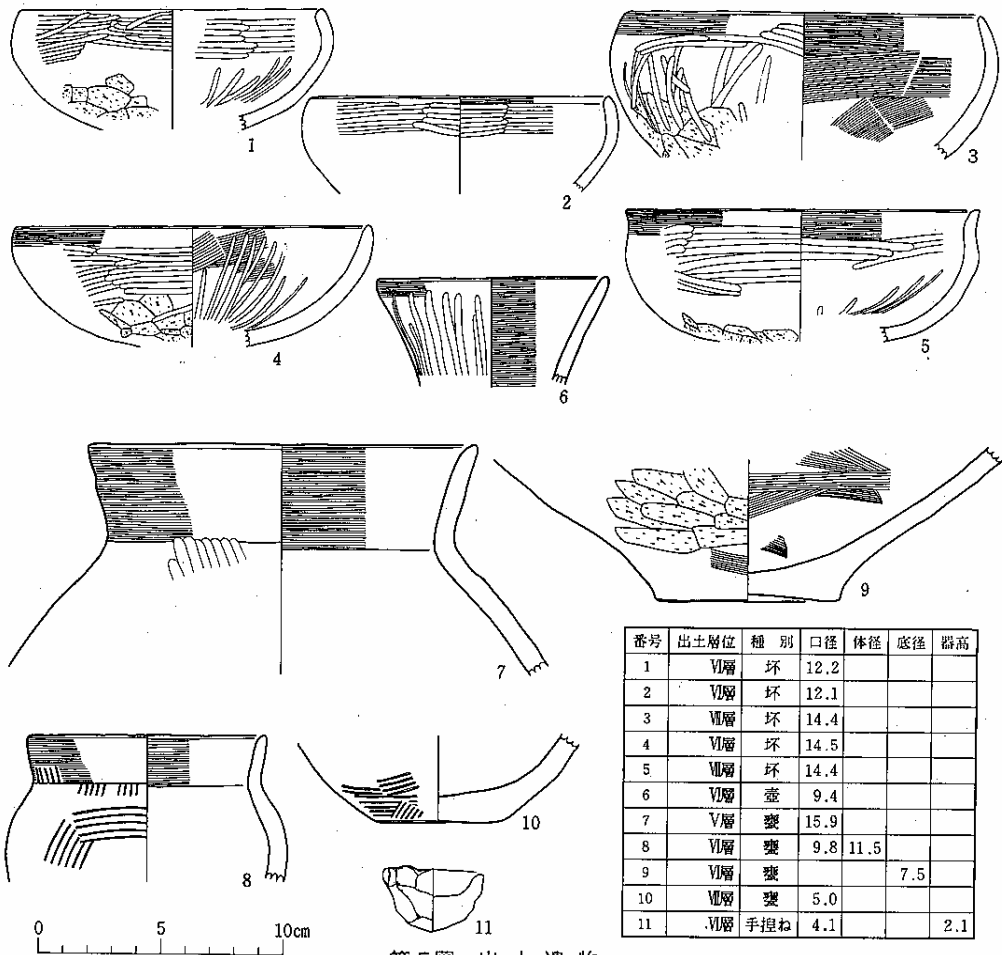
本遺跡から出土した遺物には土師器杯、壺、甕、手捏ね土器とがある。そのほとんどがBトレンチからの出土である。

〔Aトレンチ出土遺物〕

**土師器 甕** A-4区V層上面から口縁部を欠損しているがほぼ一個体分と思われる破片が出た。しかし、磨滅が激しく接合が困難なため図示するまでにはいたらなかった。したがって全体の器形については不明な点が多いが、部位別にみても、底部がやや上げ底ぎみで、体部が球形を呈する土器と思われる。器面調整は体部外面に斜位の刷毛目、底部近くはヘラケズリされており、内面にはヘラナデがみられる。

〔Bトレンチ出土遺物〕 (第5図)

Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ、Ⅶ層から出土している。そのうち図示できたのは11点である。なお、詳しくは表に記載してある。



第5図 出土遺物

### 土師器

#### 坏 (第5図1~5)

図示できたのが5点である。口縁部から体部にかけての破片で底部を欠損している。器形は体部から口縁部にかけて丸味をもって立ち上がり、口縁部が内弯するもの(1~4)、くびれて直立気味に外反するもので(5)とがある。前者の中には口縁部が直立気味に内弯するもの(4)がある。

器面調整は口縁部内外面とも横ナデ、体部はヘラケズリ後ヘラミガキが施されている。1・2は口縁部外面の横ナデがヘラミガキによって消されている。内面はヘラミガキ(1・2・5)ナデ(3)・ナデ後ヘラミガキ(4)が施されている。4・5は内外面に朱が塗られている。

#### 壺 (第5図6)

図示できたのは1点である。直線的に外傾する口縁部破片で口唇部付近がわずかに内弯する。

器面調整は外面縦方向のヘラミガキ、内面は横ナデである。

#### 甕 (第5図7～10)

図示できたものが4点である。口縁部から体部にかけての破片(7・8)と体部下半から底部までの破片(9・10)とがある。前者は口縁部が直線的に外傾する。7は口縁端部がわずかに外反し、体部が撫で肩である。後者は底部から体部にかけて、丸味をもって外傾するもので、9は大形、10は小形である。

器面調整は口縁部は内外面とも横ナデで、体部は外面がヘラミガキ(7)・刷毛目(8・10)ヘラケズリのちナデ(9)が施されている。内面はヘラナデが施されているもの(9)があるが7・8・10は磨滅のため不明である。

#### 小型手捏ね土器 (第5図11)

図示できたのは1点である。完形品で、外面に指頭による成形痕がみられ、作りは粗雑である。

## IV. 考 察

出土土器の編年的位置について出土状況・土器の特徴に基づいて検討してみたい。これらの土器が出土したのは第V・VI・VII層である。第VI層は凹地状の部分に堆積している薄い黒色土層で、第V・VII層はその上下に堆積している灰色土層である。遺物は第VI層に集中してみられ、一部その上下の第V・VII層にくいこんだ状態で出土した。したがって、これらの遺物は、出土状況からみると一定のまとまりをもつもので、限られた時期のものと考えられる。

次に、土器の特徴をみると仙台市岩切鴻ノ巣遺跡第1号住居跡床面・カマド出土土器(白鳥・加藤他:1974)と類似している。しかし、僅かに相違する点もみられる。すなわち、坏の器形細部において岩切鴻ノ巣遺跡例は口縁部内面に稜をもつものが多いのに対し、今回の調査で出土したものは、いずれも内弯ないしは直立気味に外反している。また、外面の器面調整は岩切鴻ノ巣遺跡の坏口縁部は横ナデが主体となっているが、今回の調査で出土したものは、ヘラミガキでその下に一部横ナデが残った状態を示している。壺や甕の器形はかなり相違している。第5図7の甕は口縁部が外傾し、体部は撫で肩のものである。また、第5図6の壺は口縁・頸部が直線的に外傾するもので、口縁部が僅かに内弯している。このような器形的特徴をもつ壺や甕は岩切鴻ノ巣遺跡にはみられない。この種の甕は名取市西野田遺跡第3号住居跡・第4号住居跡出土のもの(丹羽・柳田・阿部:1974)と類似しているが、口縁端部の特徴(端部外反)において異なる。壺は、留沼遺跡第1号住居跡、竪穴遺構出土のもの(手塚均:1980)と類似するが、口縁部の特徴(内弯)において異なる。

以上の検討によって、今回出土した土器群は名取市西野田遺跡・古川市留沼遺跡第2次調査と仙台市岩切鴻ノ巣遺跡の過渡的な様相を示している。全体的な土器組成という意味では岩切鴻ノ巣遺跡に近い。西野田遺跡と留沼遺跡第2次調査資料は塩釜式の中でも新しい段階のもの、岩切鴻ノ巣遺跡の資料は南小泉式に位置づけられている。この点、留沼遺跡の資料は、南小泉式に位置づけられ、岩切鴻ノ巣遺跡の資料より古い段階のものである可能性がみられる。

## V. ま と め

1. 留沼遺跡は江合川によって形成された氾濫原および自然堤防上に立地している。
2. 検出された遺構としては溝2本がある。
3. 出土遺物には土師器・小形手捏ね土器とがある。これらの土器は南小泉式に位置づけられる。
4. 今回の調査で本遺跡は塩釜式期と南小泉式期の遺物が出土する地点のあることが確認された。

### 〈引用・参考文献〉

1. 太田 昭夫 (1980. 9) : 「大橋遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ』  
宮城県文化財調査報告書第71集 P289～362
2. 小川 淳一 (1980. 3) : 「塩沢北遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』  
宮城県文化財調査報告書第69集 P277～348
3. 斉藤 吉弘 (1979. 3) : 「宇南遺跡」  
宮城県文化財調査報告書第59集 P1～68
4. 白鳥・加藤 (1974. 3) : 「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』  
宮城県文化財調査報告書第35集 P161～270
5. 高橋 多吉 (1979. 3) : 「鶴ノ丸遺跡」  
宮城県文化財調査報告書53集 P16～22
6. 手塚 均 (1980. 3) : 「留沼遺跡」『東北新幹線遺跡調査報告書Ⅲ』  
宮城県文化財調査報告書第65集 P154～222
7. 丹羽 茂他 (1974. 3) : 「西野田遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅰ』  
宮城県文化財調査報告書第35集 P19～154

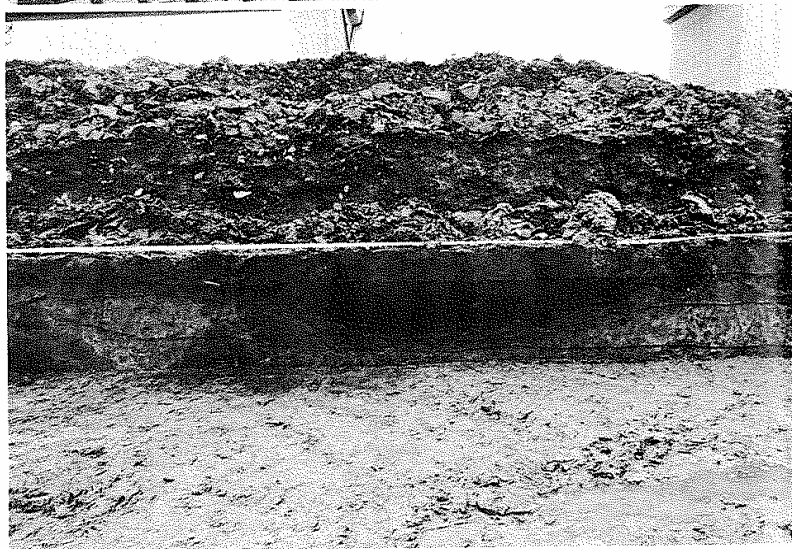
# 写 真 图 版

図版 1

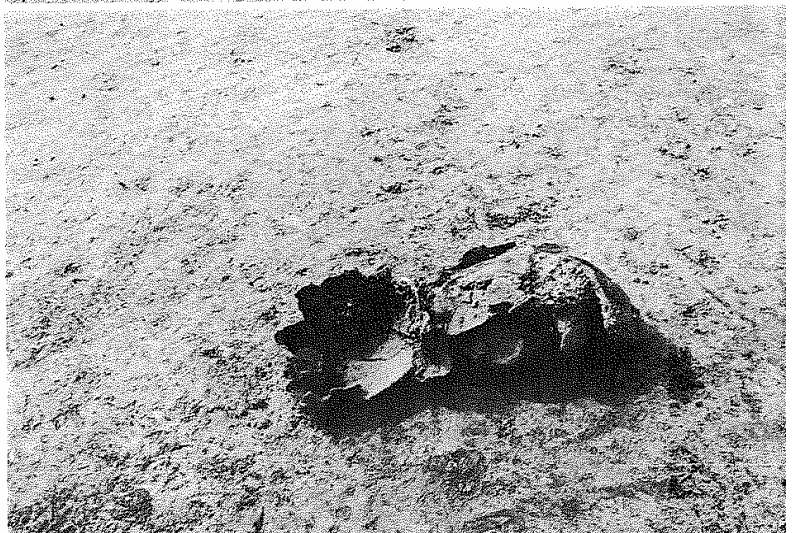
遺跡近景  
(南側から)

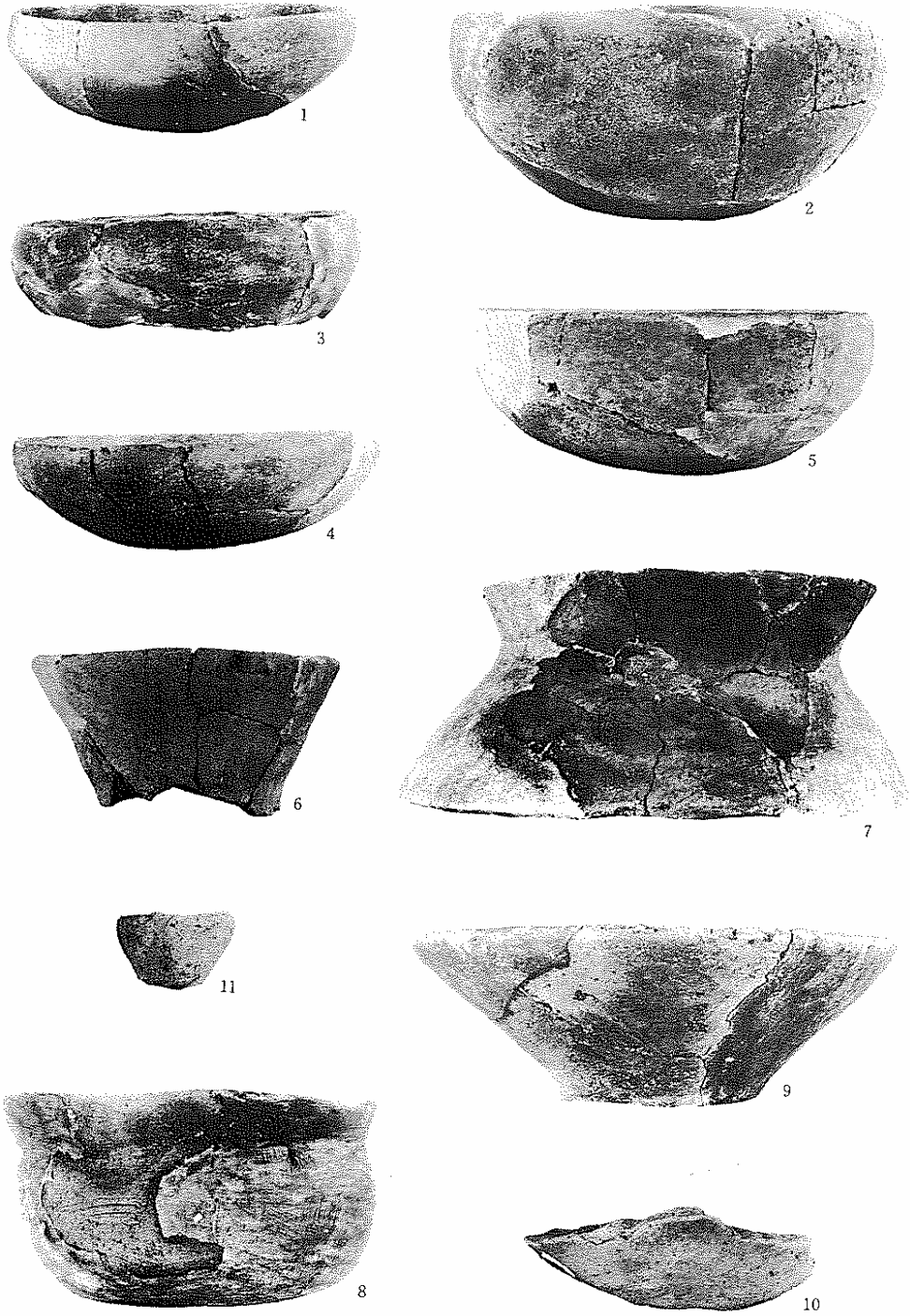


A区東壁  
(西側から)



A区遺物出土状況  
(北側から)





図版2 出土遺物

(3) ひなたまえ日向横穴古墳群



## 目 次

I. 位置と環境	557
II. 調査の経過	559
III. 発見された遺構と遺物	560
横穴古墳の構造と出土遺物	560
小穴とその出土遺物	569
IV. 考察	571
出土遺物の年代について	571
横穴古墳の構造的特徴と造営年代	572
被葬者の問題	573
V. まとめ	573

## 調査要項

遺 跡 名：日向前横穴古墳群

宮城県遺跡地名表登載番号：38002

所 在 地：遠田郡田尻町沼木字日向前 48

遺跡記号：CA

調査対象面積：80 m<sup>2</sup>

調査面積：約 60 m<sup>2</sup>

調査期間：昭和 53 年 3 月 1 日～10 日

調 査 員：宮城県教育庁文化財保護課

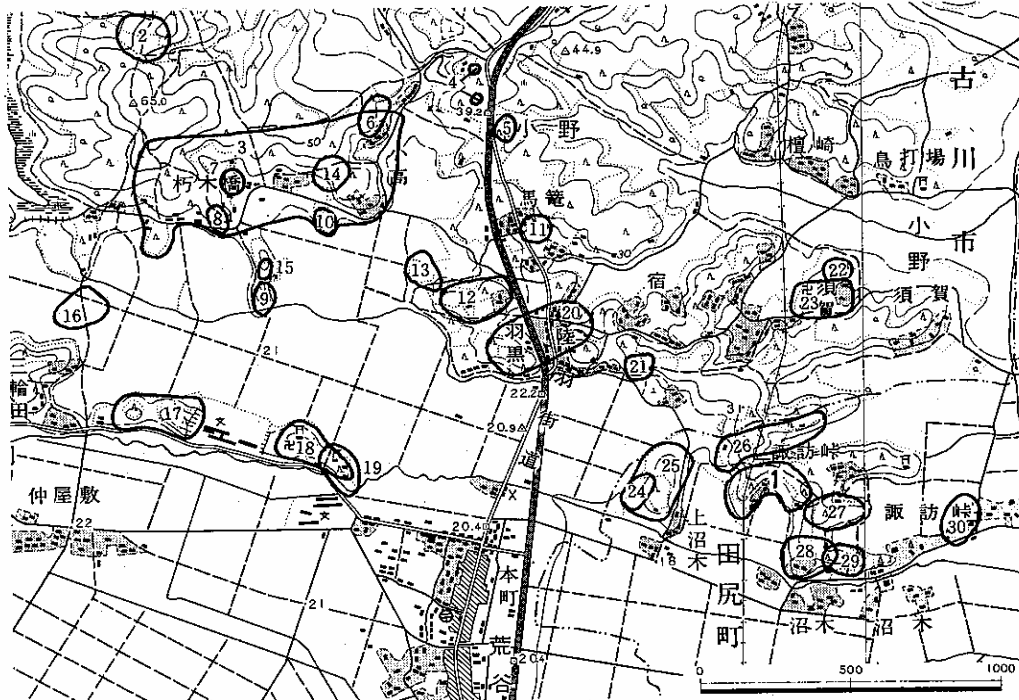
早坂春一・小井川和夫・高橋守克

# I. 位置と環境

## 位置と地形環境

日向前横穴古墳群は、遠田郡田尻町沼木字日向前に所在する。位置的には田尻町役場から北西へ約3.5kmで、国道4号線沿いにあたり、古川市北部の荒谷集落から東方約1kmの地点である。

遺跡はいわゆる大崎低地北縁の丘陵上に立地している。大崎低地は、迫川や江合川、鳴瀬川などの河川の堆積作用によって形成された標高10~15mの大谷地低地で、古川市を中心として展開し、大崎耕土ともよばれ宮城県北地方最大の穀倉地帯となっている。低地は、北は築館丘陵とこれに連節する笹岳丘陵、西は玉造・加美丘陵、南は大松沢丘陵等によって包囲された形となっている。これらの丘陵は、宮城県北部において奥羽山脈の山麓から東へのびる陸前丘陵の支群で、地表面の起伏は少なく標高約50~250mのなだらかな地形をなし、その基盤は第三紀中新統から鮮新統の石英安山岩・凝灰岩・砂岩・凝灰角礫岩・集塊岩などから構成されているも



1. 日向前横穴古墳群、2. 嵐山遺跡、3. 姥沢遺跡、4. 新田古墳群、5. 馬場遺跡、6~12. 小野横穴古墳群、
6. 新田支群、7. 姥沢支群、8. 朽木橋支群、9. 岩崎支群、10. 小高支群、11. 馬籠支群、12. 羽黒・新山支群、
13. いもり塚周辺遺跡、14. 姥沢小高遺跡、15. 岩崎古墳、16. 朽木橋遺跡、17. 権現山遺跡、18. 稲荷塚古墳、
19. 新江川遺跡、20. 羽黒遺跡、21. 一貫寺遺跡、22. 小野館跡、23. 須賀遺跡、24. 天神西横穴古墳群、25. 天神山遺跡、
26. 愛宕山遺跡、27. 大隅館跡、28. 筒水横穴古墳群、29. 沼木館、30. 宮当遺跡、

第1図 周辺の遺跡

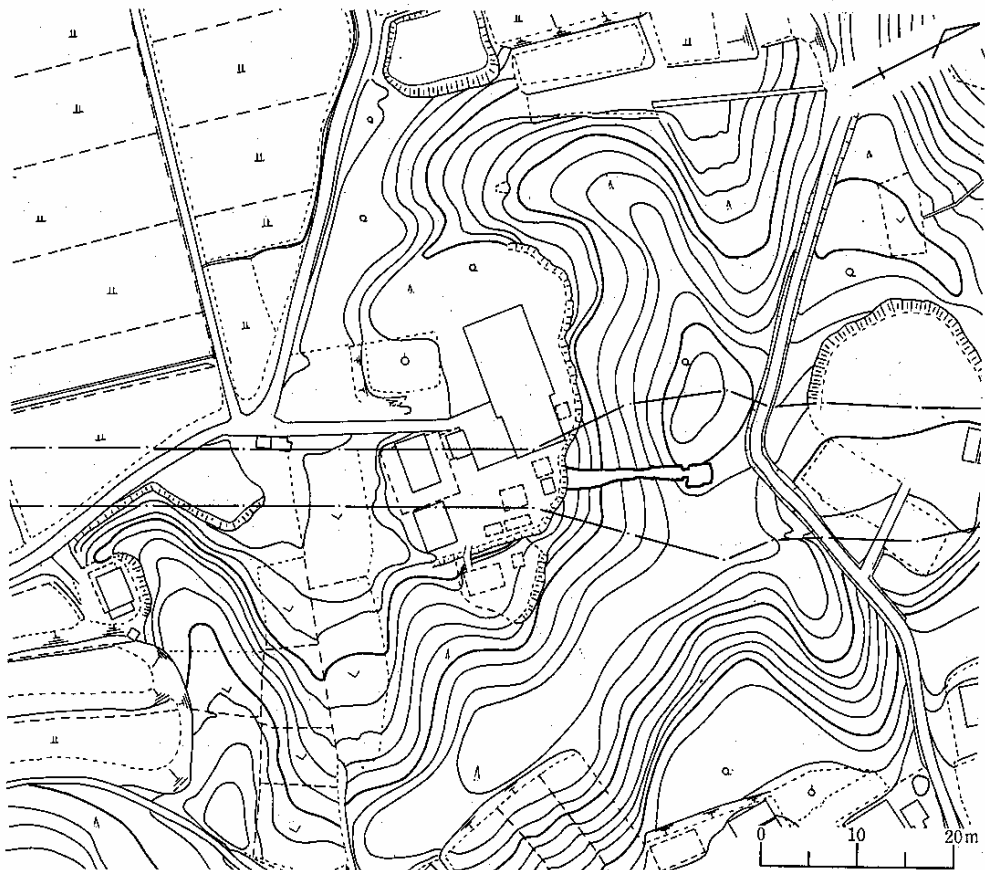
のである。そして、各丘陵の縁辺は、小河川や沢谷によって浸蝕され、その形状は舌状あるいは樹枝状、鋸歯状に入りこんでいて、末端部はすべて急崖を伴って沖積低地と接している。

古墳群は前述したように、大崎低地北縁部を構成する築館丘陵の東南端と、これに連節する笹岳丘陵の結節点付近から、さらに南東方向へ向けて島状に張り出した丘陵の南斜面中腹に穿たれ、前方に展開する広大な耕土を見下ろす急崖斜面に立地している。標高は約 31.0m、比高は 11.0m である。

## 歴史的環境

前面の大崎低地および周辺の丘陵上には、本古墳群の他にも多数の遺跡の存在が知られているが、それは特に古墳時代以降において顕著である。

古墳としては、青塚古墳（古川市）・念南寺古墳・御山古墳（色麻町）といった大型古墳があり、また、色麻古墳群（色麻町）・新田古墳群・日光山古墳群・朽木橋横穴古墳群（古川市）



第2図 遺跡周辺の地形図

追戸横穴古墳群・中野横穴古墳群（涌谷町）・山畑横穴古墳群・坂本横穴古墳群・青山横穴古墳群・混内山横穴古墳群（三本木町）・沼木横穴古墳群（田尻町）などの群集墳も多数分布している。本古墳群の南東にも筒水横穴古墳群、西には天神西横穴古墳群が知られている。

さらに、この地域には、城生遺跡・菜切谷廃寺跡（中新田町）・一の関遺跡（色麻町）・宮沢遺跡・名生遺跡・伏見廃寺跡（古川市）などの古代城柵・官衙寺院が存在しており、この地域が東北の古代史上において重要な位置にあることを示している。

これらの諸遺跡の成立の背景として、大崎低地がもつ意味は大きいとみられるのであり、それは、中世期以降までこの地域の歴史に長く影響力を与えていると考えられる。

## Ⅱ. 調査の経過

調査は昭和 53 年 3 月 1 日から開始した。当初、東北新幹線路線敷内には、横穴古墳は確認されていなかったが、隣接地域にはすでに開口している横穴古墳もあり、路線敷内にもその存在が予想された。このため、路線敷内にかかる丘陵南斜面全域を重機（バック・ホー）によって表土を除去し、遺構確認作業を行なったところ、横穴古墳 1 基が確認された。それは約 10m という長い羨道・前庭部を有するものであった。

古墳確認後、羨道・前庭部分については、ほぼ主軸線沿いに幅 30cm のアゼを設け、さらにそれと直交するアゼを羨道・前庭部に各一本ずつ設定し、堆積土の状況把握を行ないながら調査を進めた。なお、玄室内部にはほとんど土砂は堆積していなかった。

その結果、堆積土の状況から、本古墳は複数回にわたる使用（追葬）が行なわれていたことが想定できた。また、古墳の構造は、玄室内には台床をつくり出していることに加えて、羨道部前部に“化粧側壁帯”を有するというこの地方ではあまり類例のないものであることが明らかになった。さらに、前庭部側壁には 5 基の小穴も穿たれていた。

これらの細部遺構の精査を経て、調査を終了したのは 3 月 10 日である。

### Ⅲ. 発見された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は横穴古墳一基およびそれにとりつく小穴である。またそれぞれから若干の遺物が出土した。

#### 横穴古墳の構造と出土遺物

##### 構造

本横穴古墳は全長が15m以上を計測する大型のもので、長い前庭と羨門・羨道、そして玄門玄室をもち、玄室には2つの台床施設が施されている。

**【玄室】** 玄室平面形は奥壁幅（約2.1m）より前壁幅（約2.3m）が広く、かつ左側壁奥行（2.3m）より右側壁奥行（約2.7m）が長い歪んだ長方形を呈する。玄室の立面形はアーチ形である。玄室床面には奥壁沿いと右側壁沿いに2つの台床が逆「L」字状に配されている。奥台床の規模は奥行き約1m、長さ約2.1mを計測する。また、本台床は玄室床面より約62cm、石台床より約24cm高く段を形成し、台床前面には幅約5～10cm、高さ約4～6cmの縁どりがなされていて、刳貫き棺台の様相を呈するものである。また、本台床の左右側壁沿いと縁沿の三方には幅3～6cm、深さ6～10cmの周溝を配し、右台床と交叉する付近で縁を幅6～10cmと扇形に切り、水抜き溝を施してある。台床は幾分、奥壁から前壁に傾斜しているように思われる。

右台床は奥行き約80～90cm、長さ約1.7mの規模を有する。台床前面には奥台床同様、幅約6～10cmの縁どりを施してある。また、玄室床面から約40～50cmは高く段を形成し、台床床面には奥台床同様、三方に溝を巡らし、奥台床との交叉点から約40cm前壁寄り水抜き溝をつくり出している。本台床も前者同様、刳貫き棺台の様相を呈している。

さらに、これら2台床の床面には前方から周壁沿に向けて幅約6～10cmのノミによる調整痕が放射状に施されている。

台床を除く玄室床面には、左側壁沿いから左前壁沿いに幅6～8cm、深さ約4cmの溝を施すと同時に、床面全体に玄門方向へ約10度の傾斜を施している。

玄室内の全壁面は幅約8～10cmのノミによる壁面調整痕が施されている。これら調整痕はすべて天井から左右側壁下端へ向けて整然と施され、壁の境目付近では、その境目に向けて短い単位でノミを加えた刃形が明瞭に残っている。

**【玄門】** 玄門の形状（立面形）は変形アーチ形を呈し、高さは約80cmを測る。平面規模は門幅が約80cm、奥行きは左側壁沿いで約80cm、右側壁沿いで70cmと歪む。また、玄門は玄室平面形に対して左側に約50～60cm偏在した位置にある。玄門前壁下端には上端14～30cm、下端12

～20cm、深さ4～6cmの閉塞溝が設営されている。玄門天井から側壁下端へ向け、玄室同様のノミ痕が観察される。

【羨道】 羨道は全長約3.2m、玄門前壁から約2.6m前方まで天井が残り、約3m前方地点には、上端的24cm、下端14cm、深さ約6～8cmの規模をもって主軸線に直交し、左右側壁に約8～12cmくい込むように穿たれた閉塞用の溝が設営されている。これが羨門である。羨道奥端での左右両側壁の幅は約1.5m、羨門付近での幅は約1mで、羨門から奥へ扇形に開く平面形をとる。表門から約1.6m奥まった羨道中央付近の床面には、土師器坏が4個体塊状をなして伏せてあった。また、羨門から約40cmほど奥まった右側壁沿いの床面には、天井落盤時のものと考えられる。直径約28cm程の凝灰岩塊が認められた。

【前庭】 前庭部全長は約9mまで計測できたが、前方崖によって切られておりその全容は不明である。羨門付近の左右側壁までの幅が約1m、切断部分で約2.3mと羨門から前方へ漸次扇形に開いている長い前庭を構成している。羨門閉塞溝から奥は穿穴工法をとるが、前庭は自然傾斜面に平行に開削工法を採用している。したがって、前庭前方から羨門へ向って左右の側壁高は漸次高さを増し、羨門付近の側壁高は約1.6mを計測する。また、羨門閉塞溝から約1.8m前方の左右側壁の境目から羨門左側頭上へ約45度の角度をもって、左側で幅約23cm、右側で幅20～40cmをもつ化粧袖を施してある。前庭前方から羨門を見通した時、明らかに、この化粧した両袖と羨門は調和し、霊屋へ通ずる豪壮にして幽玄な門として目に映ることを意識しての装飾門とみられる。

### 羨道・前庭部の堆積層

羨道・前庭部の堆積層は次の通りである。

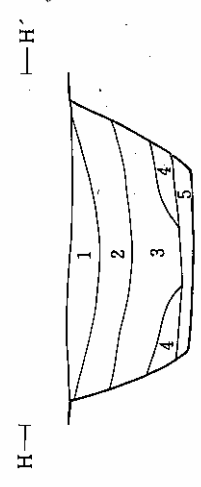
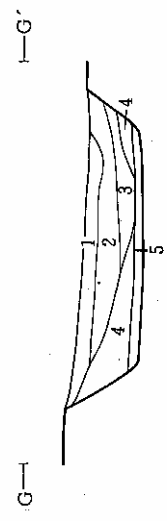
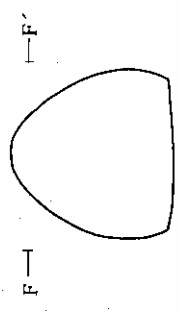
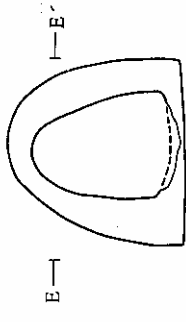
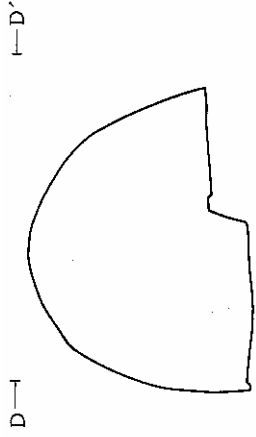
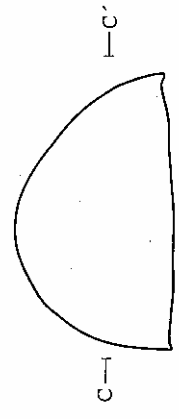
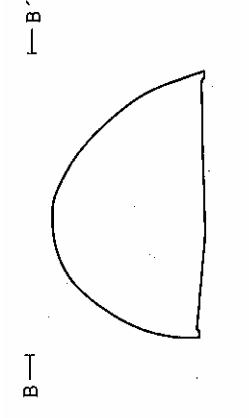
第1層：腐植物を多量に含んだ腐植土で、ソフトなシルト質黒色土である。須恵器の破片(蓋・壺)が出土している。

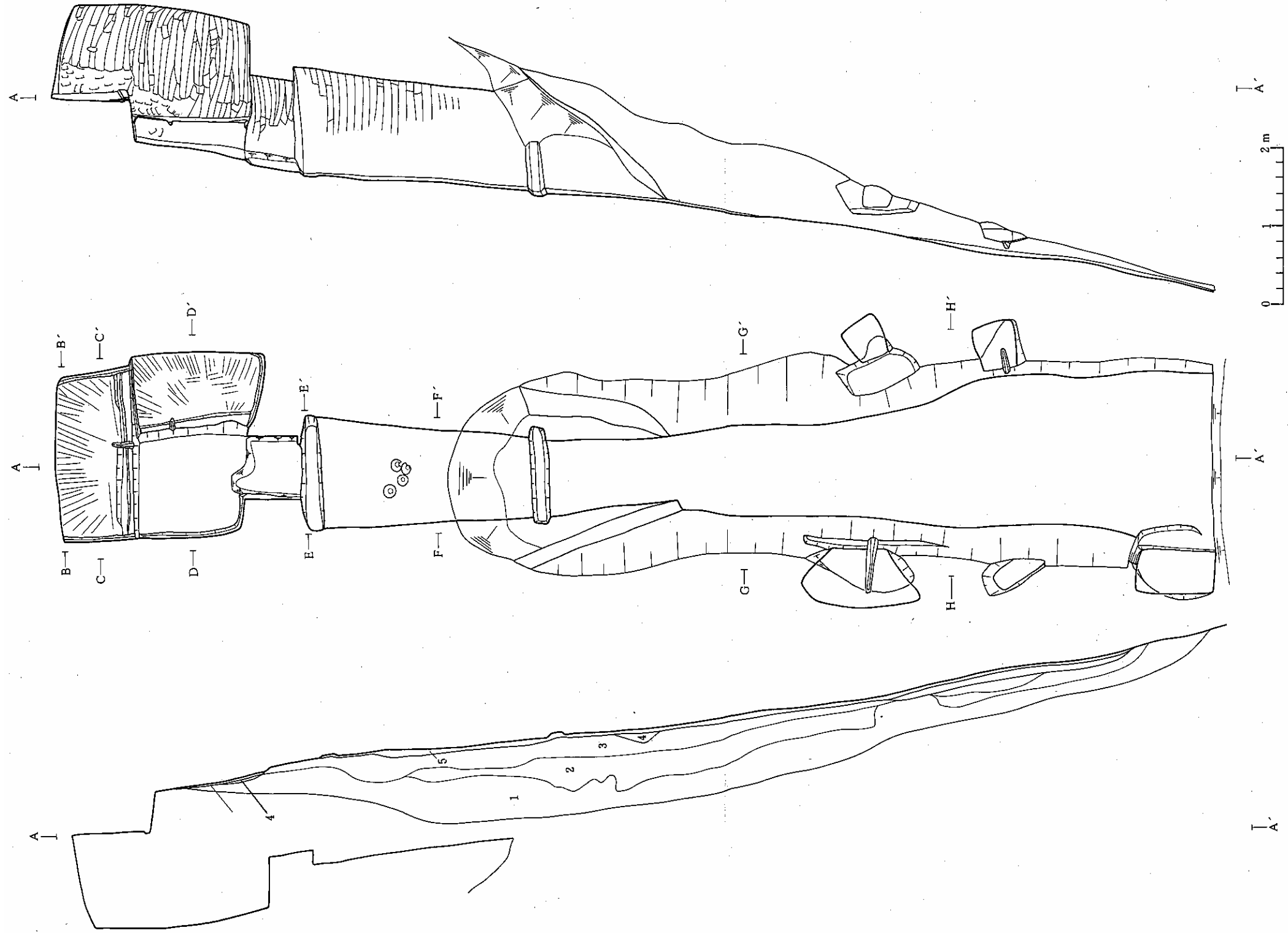
第2層：腐植物は少量含むが、凝灰岩質の細粒を混入するシルト質灰褐色土である。第1層同様須恵器片が出土している。

第3層：凝灰岩のブロックを混入するシルト質暗褐色土で、遺物は須恵器片・土師器片が出土している。羨道中央部では、下記の第5層上面に乗る層で、土師器坏(内黒)が出土している。

第4層：黄褐色の凝灰岩崩壊土で、両側沿に厚く中央部で薄い。前庭部に偏在する層である。

第5層：暗灰黄褐色を呈し、凝灰岩細粒を多量に含み、酸化鉄が斑点状に混入した、かたくしまった層である。玄門寄りの羨道部では、水成白色シルト質粘土が薄く上面に堆積している。本層は床面を覆う羨道部中央部床面からは、完形の土師器坏4点が倒





第3図 遺構とその堆積土



位の状態で出土した。

次に、以上のような各堆積層の成因について検討することとする。

第4層は前庭部に偏在する層で、混入物をほとんど含まず、凝灰岩崩壊によって生じた層である。そして第4層が分布する部分には天井部は存在しなかったとみられること、小穴が数基穿たれていることから、この層は小穴穿削に伴って生じたものと考えられる。

第5層は、すでに述べたように、玄門部付近ではその上部に水成堆積層がのっており、また層自体もかたくしまっていることなどから、ある時点の安定した層であるとみられる。成因については明確でないが、玄室内部までのびた本層は粘土質となっていることや、層中に酸化鉄がみられることから水成がその主因であると考えられる。なお、この層は、前庭部側と羨道部とでは状況が異っており、前庭部側は腐植物を多く含み黒ずんでいる。したがって、発掘調査時には明確にそれを区分することはできなかったが、羨道部と前庭部とではさらに区分されるものであると思われる。

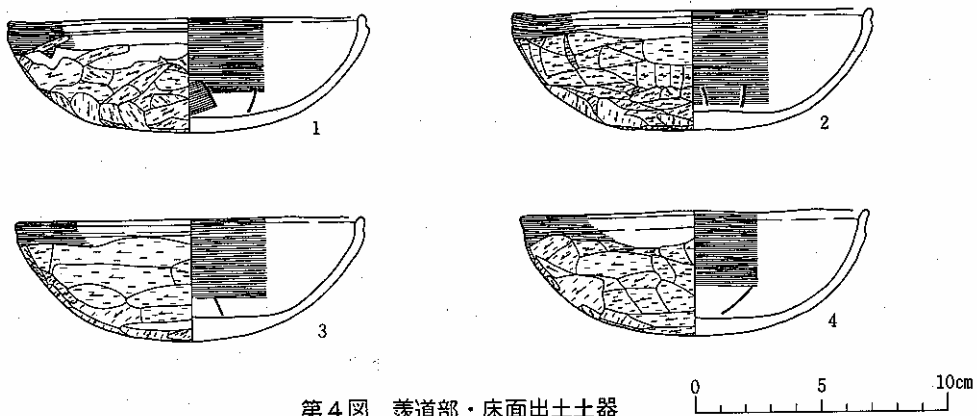
第1・2・3層は後の流入土である。層中には多くの土器片が含まれている。これは周囲にあった土器片が混入して土砂とともに流入したことを示しているが、その中には完形に近いものが含まれている点などからみて、横穴再使用時（追葬時）に内部から移動されたものが、再び流れこんだものと考えられる。

## 出土遺物

出土した遺物には土師器・須恵器・鉄製品がある。いずれも羨道部および前庭部から出土しているが、出土状態により二つに区分することができる。一つは羨道部床面上から出土したものの、他は羨道部・前庭部流入土中から出土したものである。

### 羨道部床面上から出土した遺物

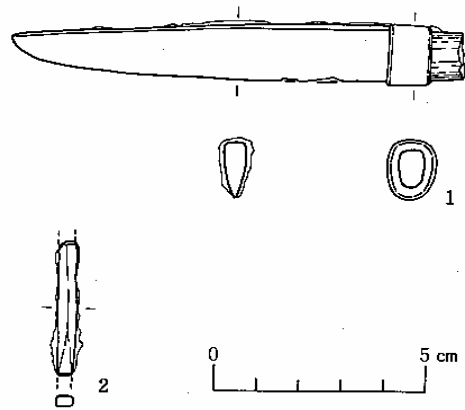
土師器坏・鉄製品がある。土師器坏は羨道部ほぼ中央部に倒位の状態でまとまって出土した



第4図 羨道部・床面出土土器

完形の4個体で、その出土状態からみて一括遺物として理解できるものである。鉄製品は玄門前の閉塞左隅から出土したものである。

**土師器坏** (第4図) : 橙褐色をした薄手の坏で堅く焼きしまっている。器形は丸底で体部は底部から丸みをもって立ち上り、口縁部直立(4)、または内弯気味のもの(1~3)である。内弯気味のものには口縁部外面に沈線状の段がめぐる(1~3)。器厚は底部で約6mm~1cmであるが、体部以上では約3~4mmと薄い。器面調整は、外面では口縁部に狭い範囲でヨコナデがみられる他は、全てヘラケズリの調整が施されている。内面はいずれも体部以上に横方向のナデが施されているが、底



第5図 羨道部床面出土鉄製品

部にはその痕跡は認められず、成形時のままの状態を残しているとも考えられるものもある。

**鉄製品** (第5図) : 1. は平棟平造りの刀子である。鋒はフクラ枯で、区は把鉤のため直接観察はできないが、全体の形状から両区と推定される。把鉤は鉄製の薄い板を環状にまいたものであるが、錆のためその重ね合せ目は不明である。把鉤と茎の間には把木が残っている。計測値は刃長が10.0cmであるが、その他は錆のためはっきりしない。

2. は小片であるが鉄鏃の茎と推定される。断面が長方形(3×4mm)をしている。

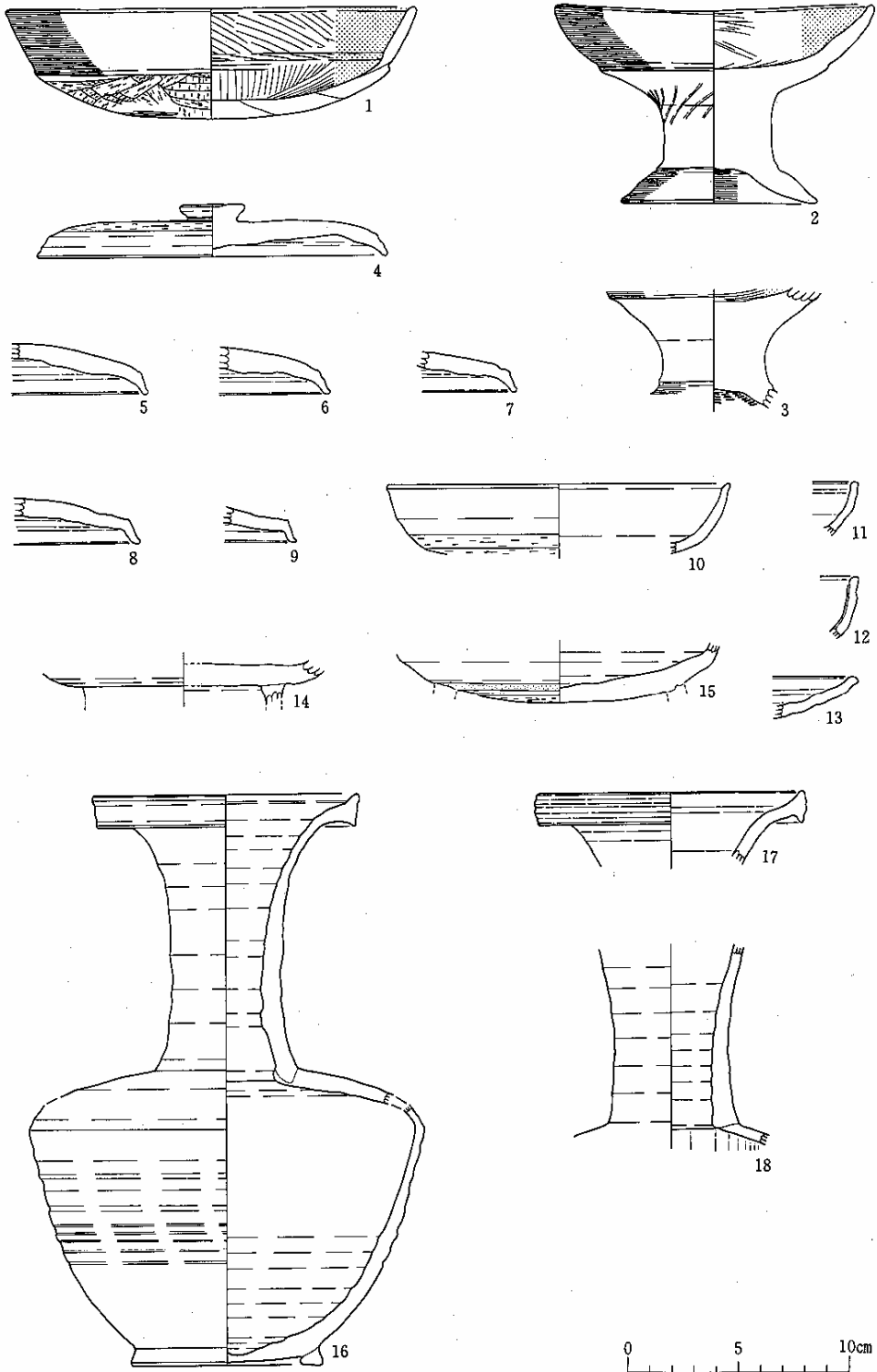
### 羨道・前庭部流入土中から出土した遺物

土師器(坏・高坏)・須恵器(蓋・坏・高台付坏・長頸壺・甕)がある。これらの遺物は各層から出土しており、層位的なまとまりは特にみられない。

#### 土師器 (第5図1~3)

**坏(1)** : 器形は丸底で、底部からゆるい弧を描いて立ち上り、体部以上は外傾気味に内弯し、口縁端部が外反気味となる。体部と底部の境では、外面には明瞭な段が形成され、対応する内面にも段が認められるものである。器面調整は外面が段を境として上部はヨコナデ、下部ではヘラケズリが施されている。ヨコナデは段の部分にまで及んでいる。内面はヘラミガキされ、黒色処理がなされている。ヘラミガキの方向は段上では口縁に平行、以下は斜めである。

**高坏(2・3)** : 2は坏部の大きさに比して脚部が短く太い。坏部の特徴は、体部外面と底部の境に明瞭な段を有し、体部・口縁部ともに内弯する。脚部はほぼ垂直に立ち円柱状を呈し、すそ部との境目にわずかな段を形成する。器面調整は外面では、坏部の段を境として上部はヨコナデが施されている。段から脚部へかけては、調整痕は不明だが、坏底部と脚部を接合する



第6図 羨道・前庭部流入土出土土器

際の貼付工具のアテメ痕が観察される。すそ部ではヨコナデが施されている。内面は坏部ではヘラミガキ・黒色処理が施されている。ヘラミガキの方向は、口縁部から体部にかけては口縁に平行、底部では不明である。すそ部の天井部はヘラナデ、他はヨコナデがかすかに痕跡をとどめている。

3. は脚の柱状部から坏部へかけての破片であるため、全体の形状は不明である。脚柱とすそ部の境に前者同様の段が観察されるものである。器面調整は外面では摩滅して不明な点が多い。内面は坏部では、ヘラミガキ・黒色処理がなされてはいるようだが、その方向は不明瞭である。すそ部天井には刷毛目痕が認められる。

### 須恵器 (第6図4～18)

**蓋** (4～9) : 蓋は天井部がなだらかな丸味をもって口縁部にいたるもので端部は丸くおさまられている。口縁部の特徴に次の二種類がある。4～7は丸味をもちながら外方に延び端部に至るもので、4には扁平なつまみついている。8・9は口縁部を外方に折りまげているもので、口縁部に近い天井部は平坦になっている。天井部はいずれも回転ヘラケズリされている。

**坏** (10～13) : 10. は口縁部が内弯し、端部で外反気味となる。体部下端は回転ヘラケズリされている。11～13は小破片である。11～12は口縁部が内弯し、端部が外面に稜をもち内面が丸くおさまるものである。14. は浅い坏で、口縁部が外傾気味に内弯するが、端部の特徴は11・12と同じである。これらは高台が付くか否かはっきりしない。

**高台付坏** (14・15) : 14. は底部が平坦なものである。底部外面は全面回転ヘラケズリされている。15. は底部が丸底状のものである。底部外面は14. と同様に回転ヘラケズリされている。

**長頸壺** (16) : 器形は、肩部が張り出し、体部下半はわずかなふくらみをみせながら底部に至る。底部には高台がつく。高台は付高台である。口縁部は上方につまみ出され縁帯状をなしている。底部の切り離しは、ヘラによるもので、その後回転ヘラケズリによって再調整がなされている。

**提瓶** (18) : 頸部から肩部に至る破片であるが、接合・復元が不可能なため、全体の器形は不明である。

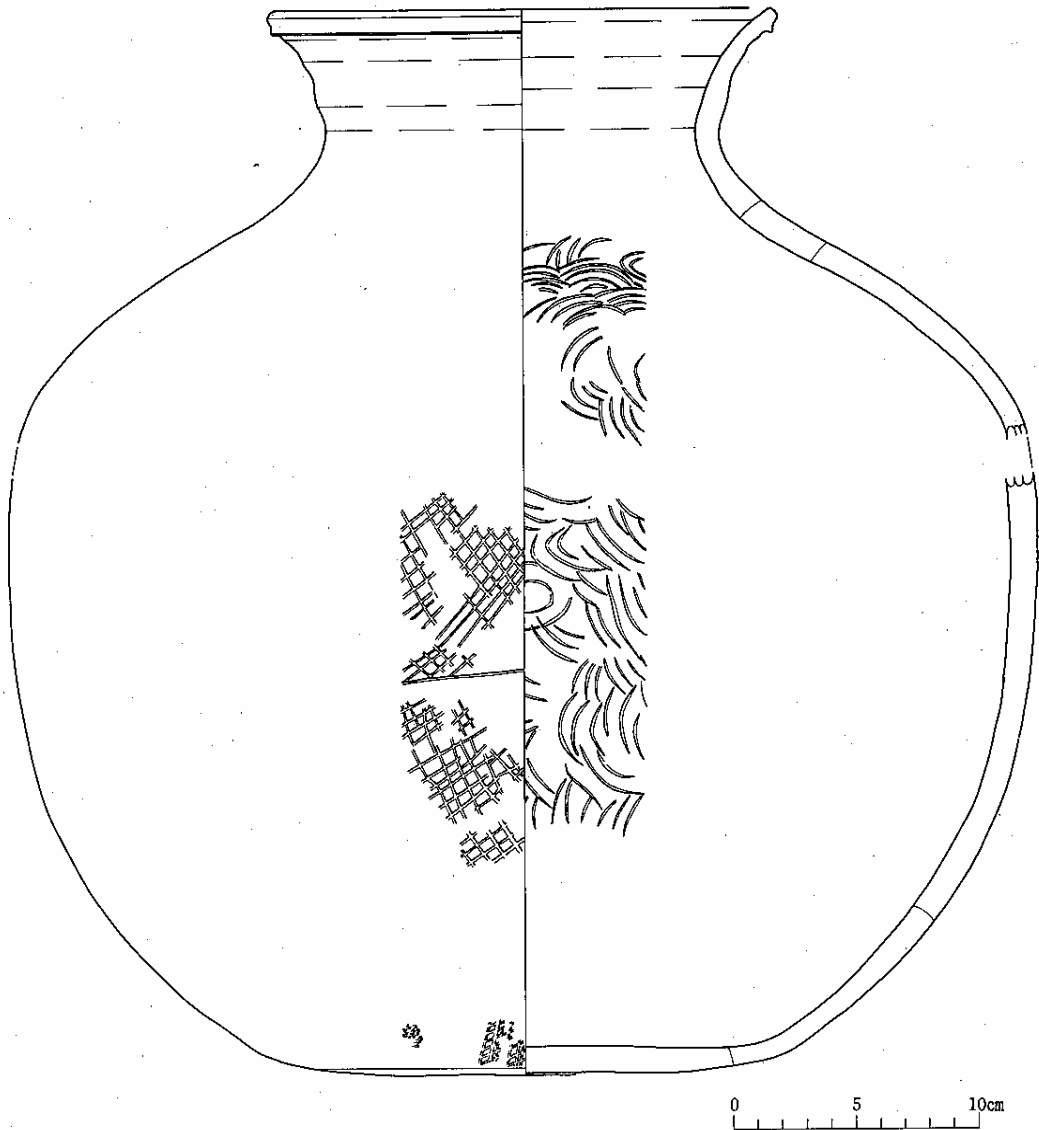
**長頸壺・提瓶?** (17) : 口縁が縁帯状をなす口縁部から頸部に至る破片である。体部を欠くため長頸壺か、提瓶かわからない。

**甗** (第7図) : 器形は底部が丸底風を示し、体部中央に最大径をもって球形を呈する。頸部からやや外反しながら口縁部へ達する。口縁部は全体的につまみ出され、とくに口縁下端は強く外方へつまみ出され、厚唇状の縁帯状をなしている。口縁部内外面ともロクロ調整が施されている。また体部外面には格子状のタタキ目が、内面には青海波のアテ道具の痕跡が認められる。

### 小穴とその出土遺物

小穴は前庭部の左右両側に穿たれており、左側壁に3基（奥から第1．2．3）、右側壁に2基（奥から第4．5）の5基がある。

そのうち、特に第1．4小穴は、羨門部から約2m の位置に左右対称の関係にあり、意識的に配置されたかの感がある。



第7図 羨道部流入土出土土器

## 構造

【第1小穴】奥行37cm、奥壁幅75cm、前端幅35cmで扇形の平面形である。天井部は奥壁から10cmほど残存している。最大高は約45cmある。底面は前方に向かってわずかに傾斜しており、そのほぼ中央部に底面幅5cm、深さ5～6cmの溝が手前にのびている。また、前端部から約4cm低い部分に幅5cm長さ1mほどの狭い段がつくられており、溝はこの段部分までのびている。玄室前端付近の床面上から倒位の状態で赤焼土器杯が1点出土した。

【第2小穴】第1小穴から約1m離れている。幅15cm、奥行30cmほどで、側壁に対し斜めにとりつき、天井部はなく溝状を呈している。

【第3小穴】左側壁前部にある。平面形は奥行30cm、幅50cmほどの方形をなすが、南端部が崖のために切られており、幅はより広がるものと思われる。手前に幅10cm、深さ10cmほどの溝状の掘りこみがある。なお、玄室部底面は前庭部底面とほぼ同一の高さである。

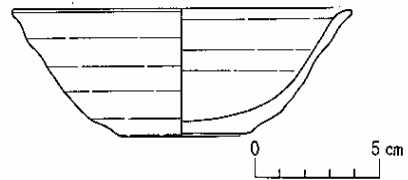
【第4小穴】第1小穴に相対するもので、玄室部分とその手前のテラス状部分とからなる。玄室部分は、幅20cm、奥行30cmのわずかに扇形気味の方角のもので天井部までの高さは約30cmある。テラス状部分は、玄室部底面より4cmほど低く、40×20cmほどの長方形を呈す。

【第5小穴】幅25cm、奥行30cmで平面形は方形である。天井部までの高さは約25cmある。第1小穴と同様、底面ほぼ中央の手前側には深さ5cm、幅5cmほどの溝が刻まれている。

以上の5基の小穴のうち、第1．4．5小穴については、その形態からみて、埋葬施設としてのいわゆる小穴として理解できる。しかし、第2．3小穴についてはその根拠はない。あるいは後世において、全く別の意図のもとに掘られたものである可能性もある。

## 出土遺物

出土遺物としては、第1小穴床面から出土した赤焼土器杯1点だけである。底径5.2cm、口径13.7cm、器高5cmである。器形は底部が平底で、底部から体部そして口縁部へほぼ直線的に外傾する。底部は回転糸切りの技法によるもので、内外面ともロクロによる調整がなされ、器面の再調整は全くみられないものである。

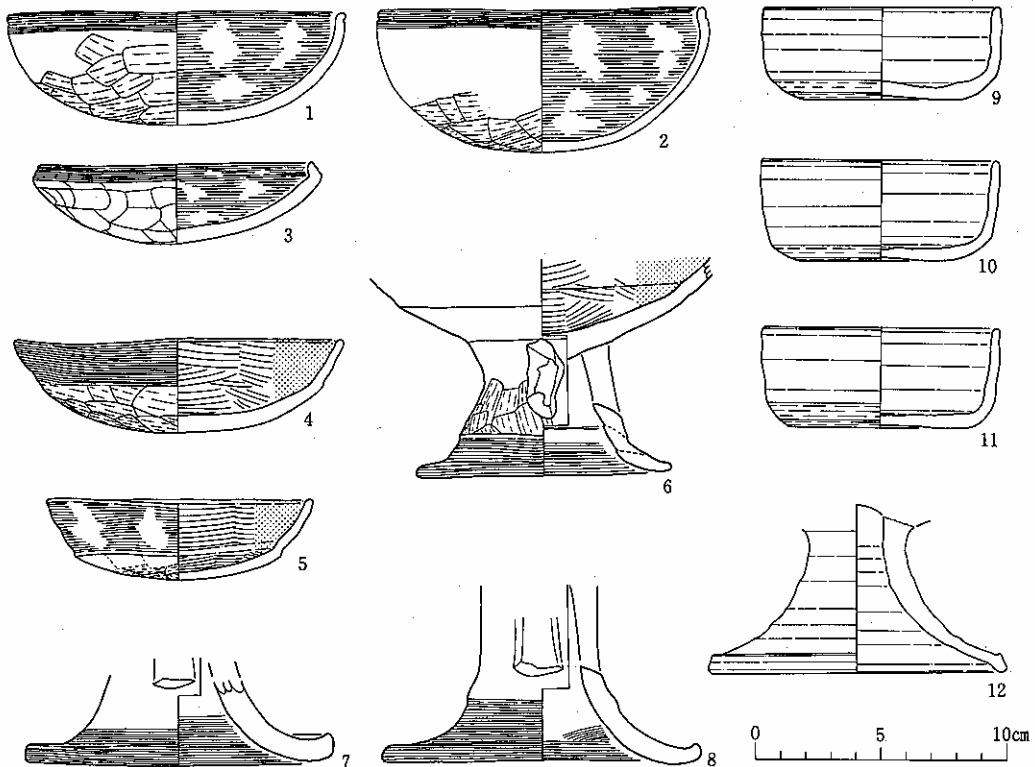


第8図 第1小穴出土土器

## IV. 考 察

### 出土遺物の年代について

**羨道部床面出土の遺物：**羨道部の床面からは完形の土師器坏が4点出土し、それらは出土状況からみて一括遺物として理解できるものであることは既に述べた。この種の土器は、宮城県の在地的な土師器（内黒土師器坏）とは明らかに相違するもので、関東地方の鬼高式終末期から真間式初期にみられるものである。<sup>(註1)</sup>この橙褐色薄手の土師器坏は、日向前横穴古墳では宮城県の在地的な土師器と相伴していないため、両者の関係を把握することはできなかった。両者の関係を知りうるものとしては仙台市郡山遺跡をあげることができる。郡山遺跡の外郭南西部大溝の第1層中からは一時期にまとめて捨てられたような出土状況で、<sup>(註2)</sup>宮城県の在地的な土師器坏（第9図4・5）・高坏（第9図6～8）と鬼高式終末期から真間式初期の土師器坏（第9図1～3）、さらに須恵器坏（第9図9～11）・高坏（第9図12）が出土している。第9図1・2は、焼成がやや軟質なことを除けば器形・製作技法・器面調整などの点で日向前横穴古墳のものと同様でよく似ており、ほぼ同時期のものと考えられる。相伴する内黒の土師器坏



第9図 仙台市郡山遺跡南西外郭大溝第1層出土土器

は蔵王町塩沢北遺跡第1号住居跡の床面から出土したもの（小川淳一：1980）と似ているが、細かな点でやや新しい様相を示している（口縁部の屈曲と口縁端部の特徴）。また、須恵器は塩沢北遺跡の坏が外面に段をもつものに対し、郡山遺跡の坏は段をもたず、時期的にやや新しいものである。これらの点から見ると、郡山遺跡南西外郭大溝第1層の土器群は塩沢北遺跡に近い時期のものではあるが、それより僅かに新しいものと考えられる。したがって、日向前遺跡の羨道部床面から出土した4点の土師器坏も、塩沢北遺跡第1号住居跡よりも僅かに新しい時期のものと推定される。

**羨道・前底部流入土出土の遺物：**羨道・前庭部流入土からは土師器坏・高坏・須恵器蓋・長頸壺・提瓶・甕が出土している。土師器坏は観音沢遺跡のもの（加藤・阿部：1980）と似ているが、器形細部の特徴（口縁部の屈曲と口縁端部）において僅かに古い様相を示している。須恵器は蓋・坏・高台付坏などにおいて涌谷町長根窯跡A地点のもの（佐々木・桑原：1971 岡田・佐々木・桑原：1972 桑原・辻：1976）と極めてよく似ておりほぼ同じ時期のものと考えられる。<sup>(註3)</sup>長頸壺・提瓶・甕は細かな点で違いはあるもののほぼ同じ時期の特徴を示しており、特に新しいものは含んでいない。

以上のように、羨道床面と流入土から出土した土器には、時期差がみられ、それは土師器と須恵器相互の関係において矛盾しない。

**小穴出土の遺物：**小穴から赤焼き土器坏が1点出土している。この種の赤焼き土器坏は高清水町手取遺跡第3号住居跡出土のものと類似している（早坂・阿部：1980）。手取遺跡の赤焼き土器坏は表杉ノ入式期でも比較的新しい段階のもので、平安時代後半のものと考えられる。

以上のように、羨道部床面・羨道・前庭部流入土、小穴から出土した土器にはそれぞれ時期差がみられた。その違いは、羨道部床面と羨道・前庭部流入土のものでは僅かなものであるが、小穴のものでは大きい。それらを整理してまとめると次のようになる。

羨道部床面出土土器：郡山遺跡外郭大溝第1層出土土器（塩沢北遺跡より僅かに新しい）の時期。

羨道・前庭部流入土出土土器：長根A地点窯出土須恵器（多賀城創建期以前観音沢遺跡より僅かに古い）の時期。

小穴出土土器：平安時代後半の時期。

## 横穴古墳の構造的特徴と造営年代

本横穴のもつ構造的特徴としては、前庭・羨道・玄門・玄室と整齐形の横穴であること、全長が約15mと大規模であること、玄室には2台の有縁刳貫の台床をもつこと、羨門付近に装飾を施した化粧側壁帯が左右に施されていること等を上げることができる。全長が10mを越す横



穴となると、県内でも数が少ない。

次に、横穴古墳の造営年代について考えてみたい。出土遺物の中で最も時期的に古いものは羨道部床面から出土したもので、郡山遺跡外郭大溝第1層の時期と考えられるものである。これらは、出土状況などからみて、横穴古墳造営時に近い時期を示すものであろう。羨道・前庭部流入土出土のものは、これらよりも僅かに新しいが、多賀城創建以前のもので、追送に伴う時期のものと考えられる。

小穴は、構造的な面さらに堆積土の状況から、横穴古墳の前庭部の壁を掘り込んだもので時期的に新しいと推定されるものである。また、出土遺物を見ると第1小穴から平安時代後半の赤焼土器坏が出土しており、小穴もこの時期のものと考えられる。

## 被葬者の問題

本横穴古墳は玄室に2つの有縁刳貫台床をもち、玄門・羨道・表門・前庭を備えた大規模なものである。造営時に直接供献された遺物は発見されなかったが、造営時もしくはそれに近い時期のものとして羨道床面上の土師器坏をあげることができる。この土師器坏は既に述べたように関東地方の鬼高式終末から真間式初期のもので、東北地方の土器とは明らかに異なるものである。玄室床面から遺物が出土していないため、この種の土器の意味を過大に評価することは差し控えなければならないが、次のような可能性を指摘しておきたい。

1. 被葬者が関東地方の人で、埋葬時に故郷の土器をあわせて供献した。
2. 被葬者は在地の人であるが、関東地方から搬入された土器を埋葬時に供献した。

このいずれか、今回は明らかにできなかったが、横穴古墳出土土師器の中には東北地方の在地の土師器の他に関東地方のものが確認されるようになってきた。その例として、ここで報告した日向前横穴古墳の他に、朽木橋横穴古墳群・山畑横穴古墳群（氏家相典：1972）青山横穴古墳群（佐々木安彦：1975）さらに実見していないが川北横穴古墳群<sup>(註4)</sup>（氏家相典：1970）などのものをあげることができる。これらは、今まで、引田系・住社系の土師器として報告されてきたが、他の出土遺物との関係からみると、古墳時代終末期を遡ると考えられるものはない。また、8世紀前半よりも新しいと考えられる明らかなものもない。したがって、時期的にはかなり限られているとみることができる。

この限られた時期に何故このような現象が生じたかについては、今後の課題としたい。

## V. ま と め

1. 本横穴古墳群は、築館丘陵と笹岳丘陵の結接地点の丘陵の南斜面を穿って造営され、西の

天神西横穴古墳と東の筒水横穴古墳群の中間にあって、大きくはこれら両古墳群の範ちゅうに入るものである。

2. 全長が15mを越える大規模な横穴で、前庭・羨門・羨道・玄門・玄室と整齐形横穴で、玄室には2つの有縁刳貫台床を有し、羨門付近には装飾袖の両側壁を施され、閉塞施設は羨門・玄門の二重閉塞を採用している。
3. 本横穴古墳の造営年代は多賀城創建以前である。
4. 今回の調査ではこの1基にとどまったが、路線敷の左右外側にも更に続いて分布しているものと思われる。

(註1) 本書に収録してある清水遺跡第V群土器とともに関東地方の土器と比較検討を行なった。その中で、最も有力な地域と推定されるのは群馬県である。

(註2) 仙台市教育委員会木村浩二氏の教示による。

(註3) これらの須恵器の大部分は長根A地点窯から供給された可能性があるとの教示を桑原滋郎氏から受けた。

(註4) 報告書に掲載されている実測図で判断すると日向前横穴古墳出土のものに似ている(平・加藤・氏家：1970)。

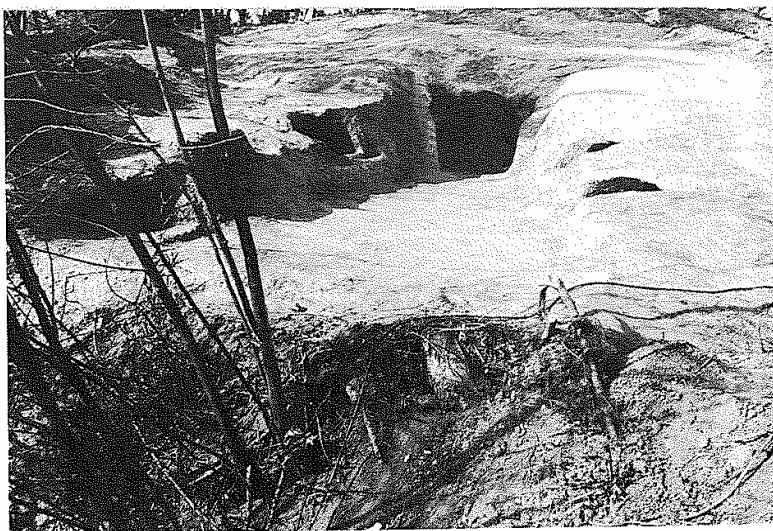
### 〈引用・参考文献〉

- 氏家 和典 (1970. 6) : 「宮城県玉造郡岩出山町川北横穴群発掘調査報告書(第一次)」『岩出山町史』  
P. 1～16 岩出山町
- 氏家 和典 (1973. 3) : 「山畑装飾横穴古墳群発掘調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』  
P. 1～78 宮城県教育委員会
- 小川 淳一 (1980. 3) : 「塩沢北遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ」『宮城県文化財調査報告書』  
第67集 P. 279～347 宮城県教育委員会
- 岡田・佐々木・桑原 (1972. 3) : 『長根窯跡群』Ⅱ P. 1～18 図版1～8 涌谷町教育委員会
- 加藤・阿部 (1980. 9) : 「観音沢遺跡－東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ」『宮城県文化財調査報告書』  
第72集 P. 131～349 宮城県教育委員会
- 桑原・辻 (1976. 3) : 『長根窯跡群』Ⅲ P. 1～25 図版1～4 涌谷町教育委員会
- 佐々木・桑原 (1971. 2) : 『長根窯跡群』 P. 1～8 図版1～6 涌谷町教育委員会
- 佐々木安彦 (1975. 3) 「青山横穴古墳群」『三本木町文化財調査報告書』第3集  
P. 7～26 三本木町教育委員会
- 早坂・阿部 (1980. 3) 「西手取・手取遺跡－東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ」『宮城県文化財調査報告書』  
第63集 P. 253～408 宮城県教育委員会

# 写 真 图 版

图版 1

横穴古墳全景

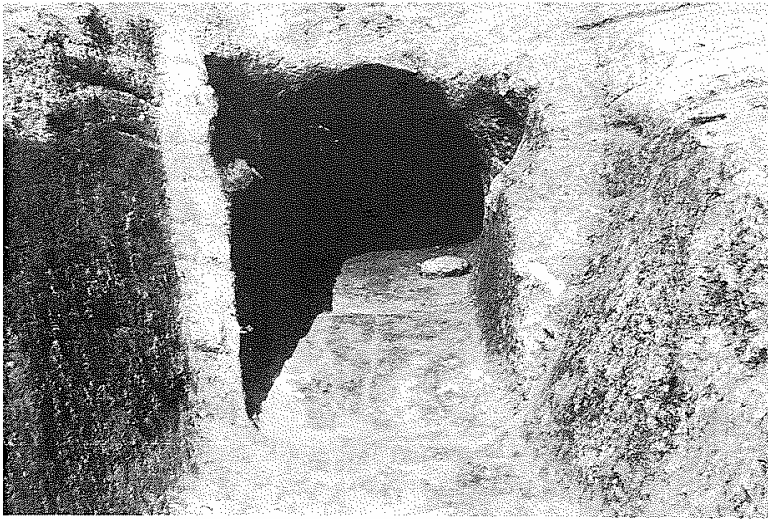


堆積層

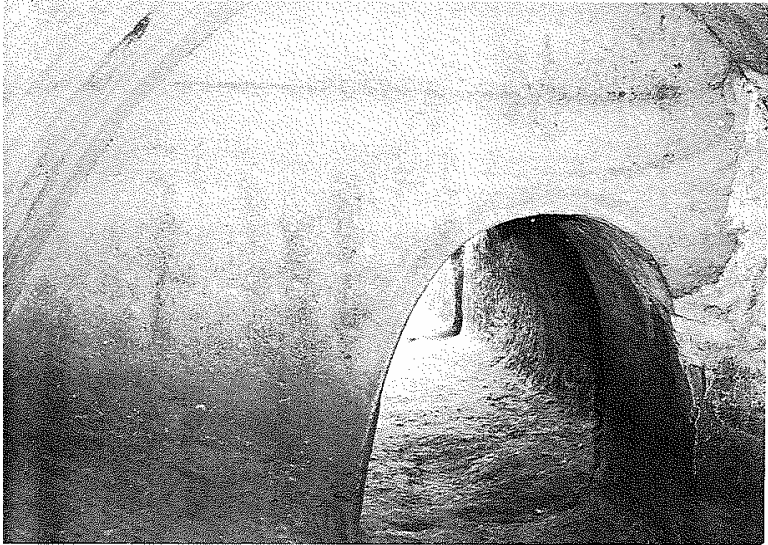


前庭





羨 門



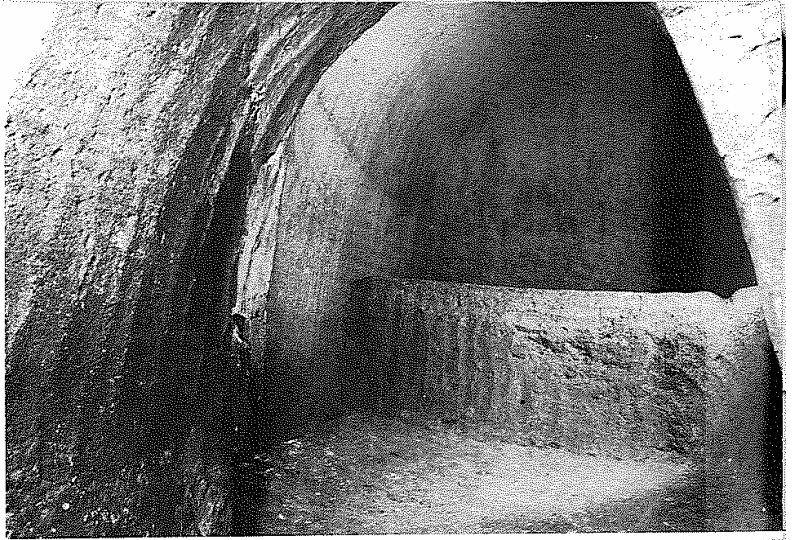
玄室から羨道



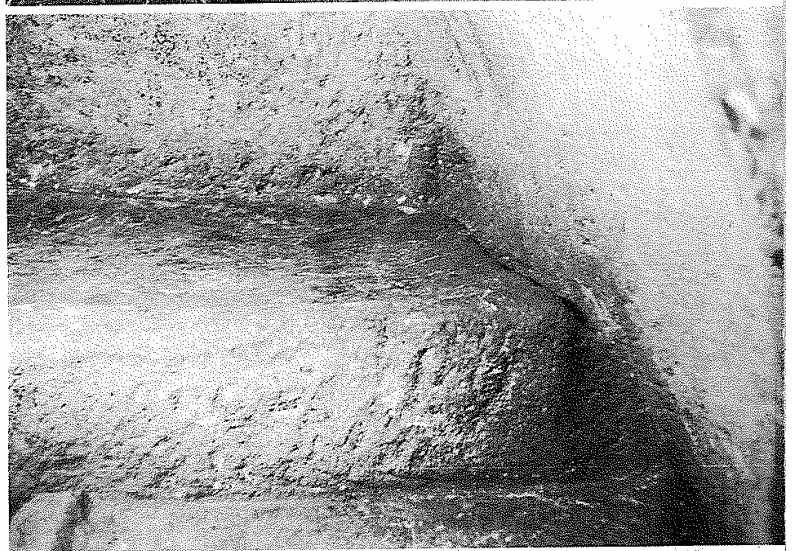
玄 門

図版 3

玄室奥壁台床



同 細 部



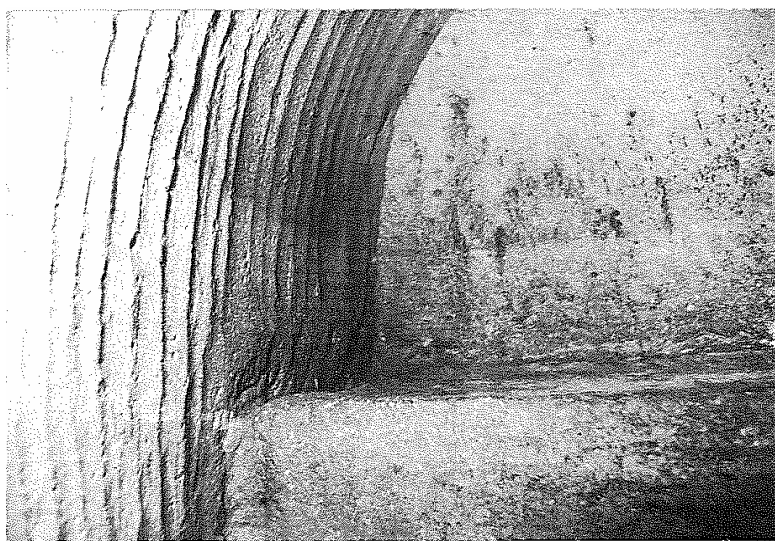
玄室右側壁・台床





図版 4

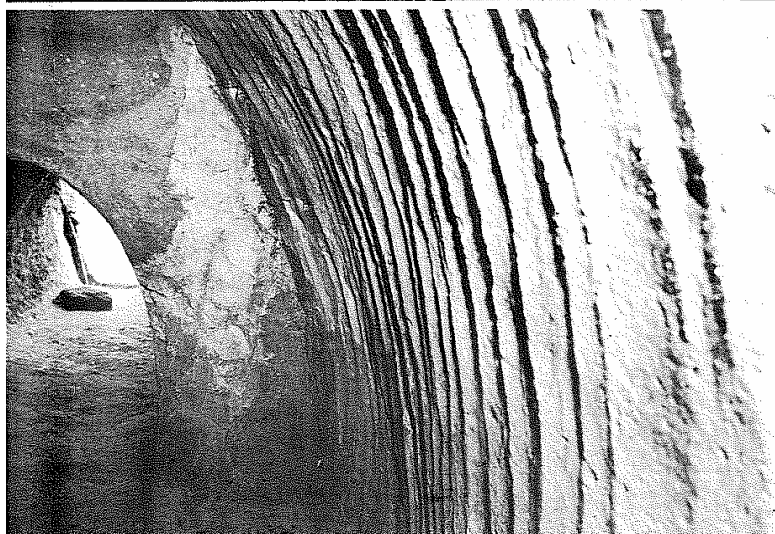
玄室右側壁ノミ痕



玄室右側壁同



玄室左側壁同  
(玄門方向)

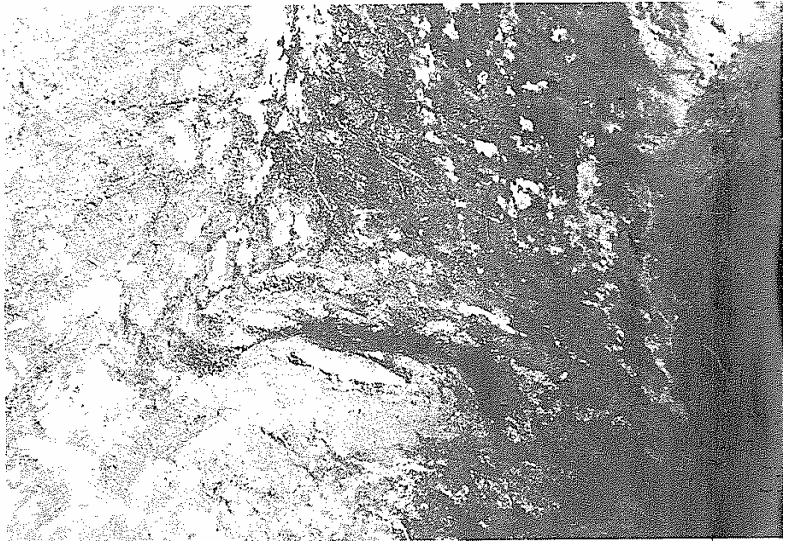


図版 5

羨道部遺物出土状況



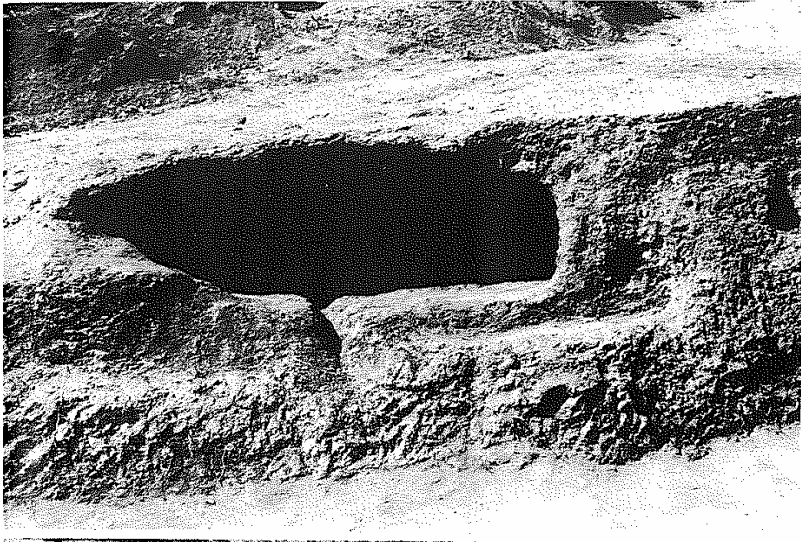
刀子出土状況



第1小穴遺物出土状況

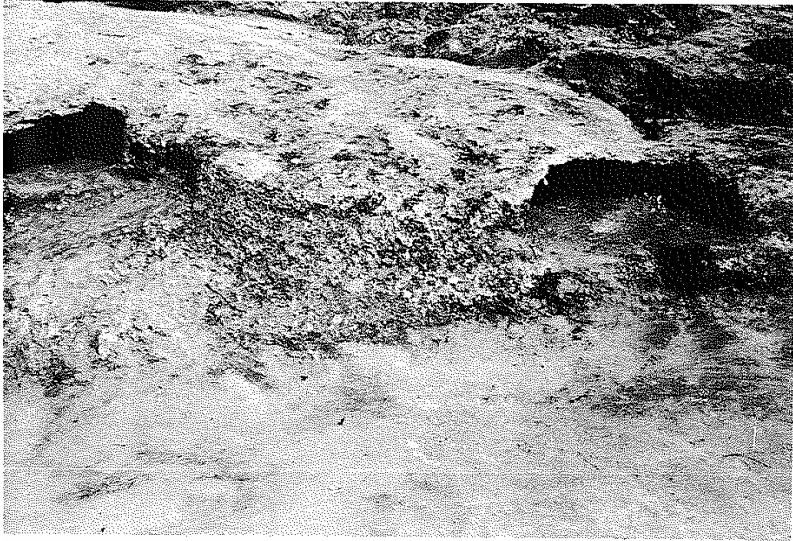




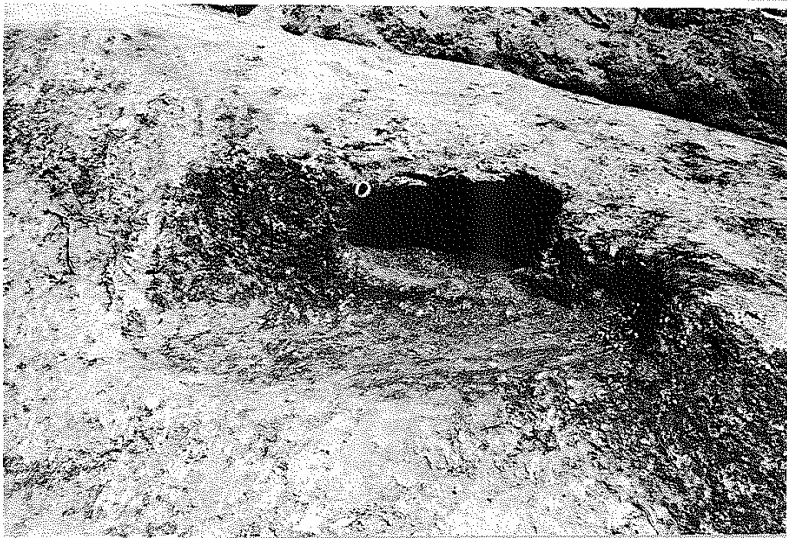


图版 6

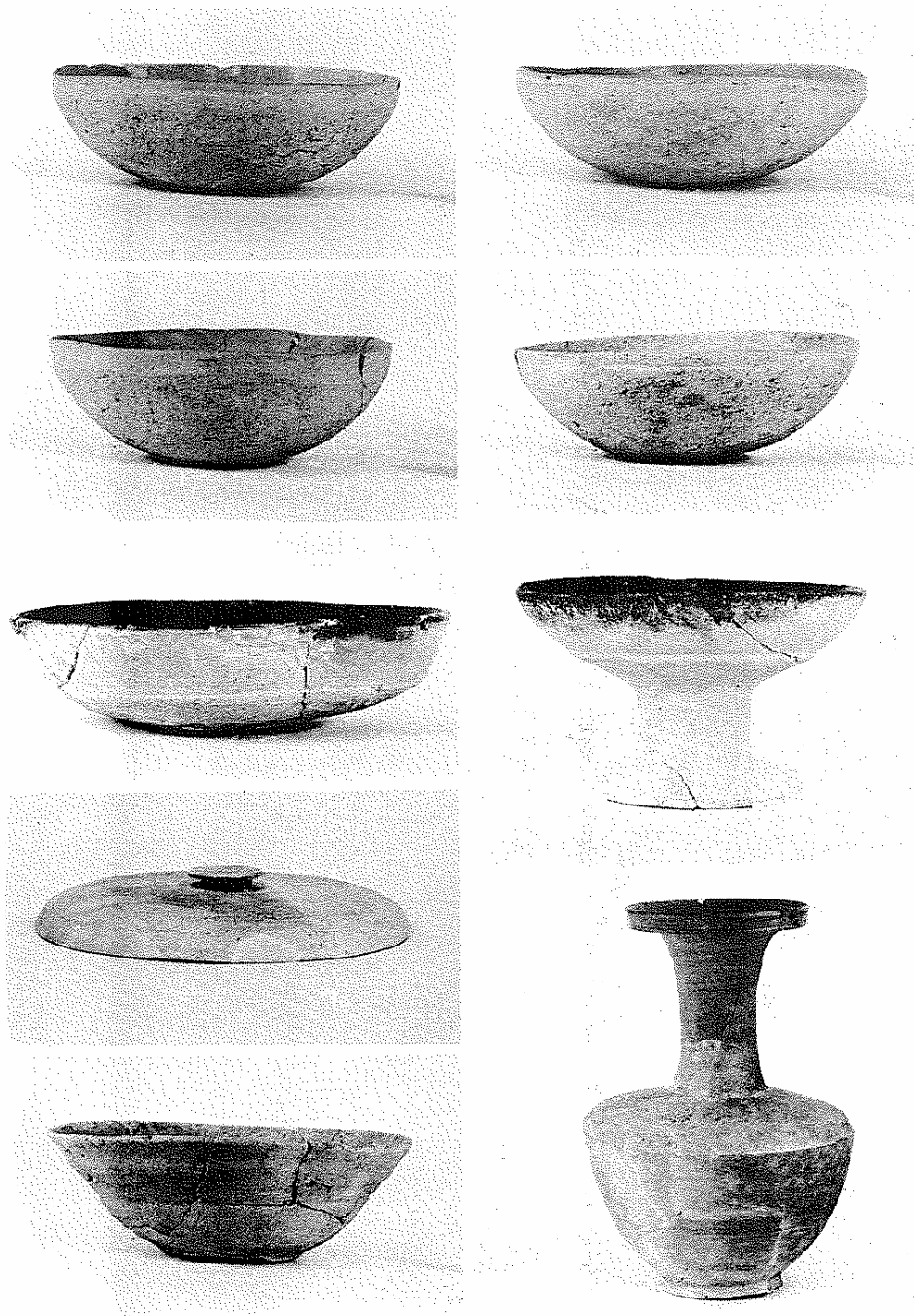
第 1 小穴



第 4 · 5 小穴



第 4 小穴



圖版7 出土遺物